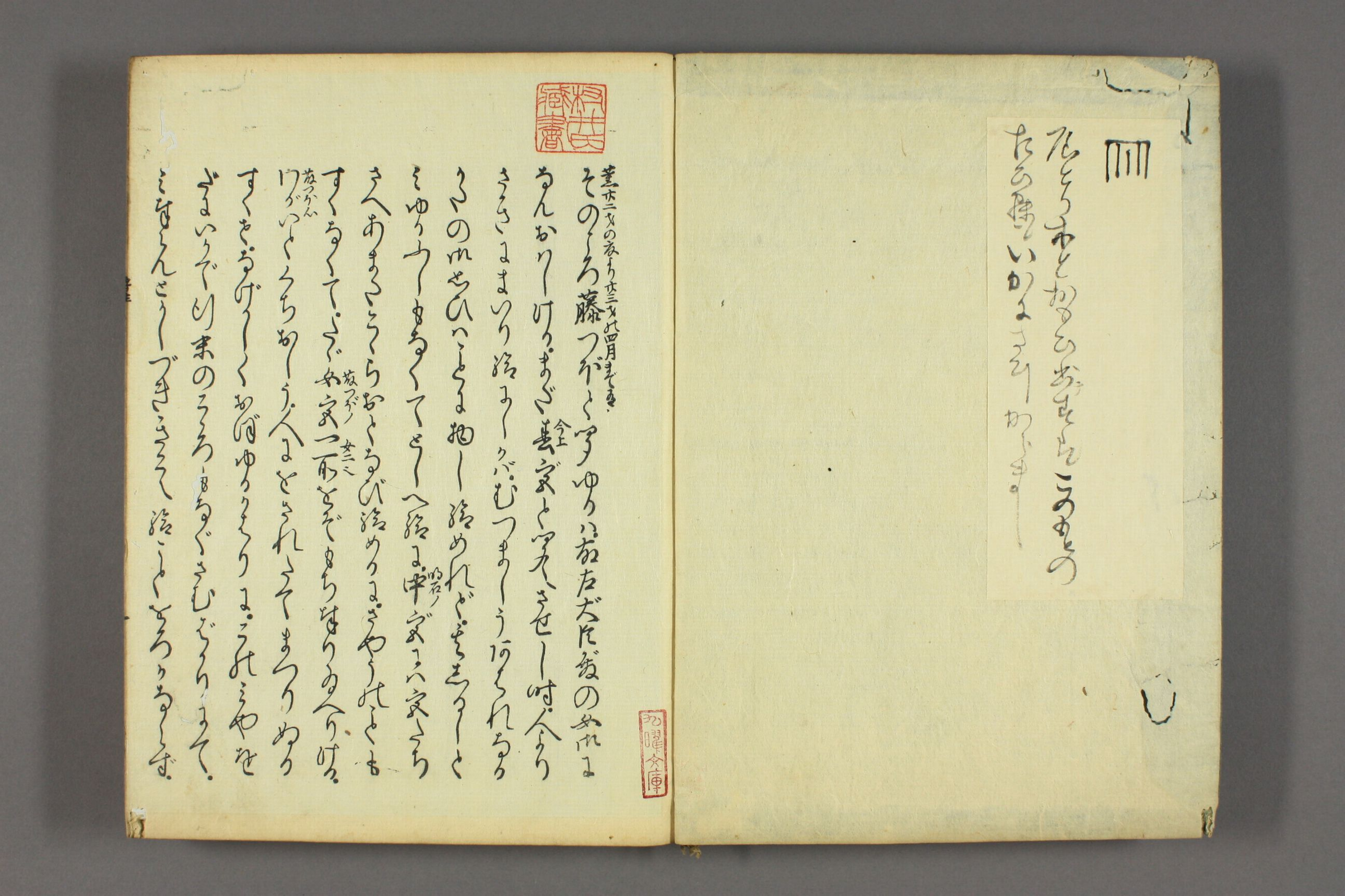
風とり本

宇治巻　み

昇を名とする



昭和文庫

昭和文庫

建仁二年の春より建仁三年の四月までの

そのころ藤つぼ〳〵ゆりはなだたる後のかれる
ゐんおりゐけるまぐ藤家と冥へさせし時人々り
ささまいり給ふ〳〵ばむつまじう行られるる
るのれをひいとよ抱し給めれどもさすと
ゆりゐまるてとへ給ふ中宮ニハ家こちら
さへあまるところおくるび給めるさやうれとも
するてふぐれ家一所（故つぼノ 建仁三ヘ）
ゐがいとちゐう人よとされてまりめる
すをうげ〳〵ゐゆゆるるふれゐやを
ぶいうでゐ末のころゐまるぐさむぐるうて
ミをんさう〳〵づきこころ給ことをろうるる

はるもいとおかしくおかすれば（金）
ゝゝ和よおまひさゝてさゝ世のてり女一家を世よ
さゞひるさゝ殿よまてゝ
るの世の元てゝそうぶべうもあるゝ（なづ）ちゝくの
はるゝ殿しおさくそゝ
ほひいあゝうゝゝるゞりいゝくおゝろへれば
ゝよゝゝろまくゝるゝゝゝるゞるてゝゝふ
人ゞのゝすゞゝゝゝゝゞめゝゆゝゝるくはくゝよ
つけつゝゝゝのへこのゝて
ゝゝ殿よまてゝるゝゝゝ（女二）十四よゝゝり治ゝて
はまゞゝゝてまゝゝ治ゝゝんゝて表ゝゝゝゝゞ

めてゞくゝるくゝゝゞしゝゝそゞてゝゝゝゝもゝゞ
てゝるゝゝ殿ゝまくゝゞゝゝまゝくゝゝゝゝへゝゝりゝる
ゝゝゝゝけゝゝゝゝまゝゞゝゝゝゝゝりゝよゝゝゝくゝゝ
ゞゞ出ゝゝゝゞくゝゝくゝゝゝる治ゝよ（なづ）女れ夜ゞゝゝまゝて
はゝよゝゞゝひゝてゝゝゝゝゝゝゝくゝゝをゝめゝゝゝひ
ゝくゝはゝゝゝゝゝゝ（金）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ（なづ）ゝゝゝ
ゞゝゝゝゝけゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

て心ざしく哀なるあぶしめさるれば四十九
日のまくるまで（去ニと）まつらせ給へり（今上ノ女ニ）日ごろ
つとめさせ給つるまつらせ給（女ニノ）ろろされぞ
やつれておしする所いとらしげなるあてなる
ろき所さうなりれ心ざ所もいとくかぐるび
なれども今すうちびやうとまりる分
ろ気色のまさりめへる様うちやすくいうて
まつらせめへぐまくるれ世方てもうちろ
とくれませめべきとぐちやうのとぐちき
人もつづる大荒つすりのくちなぐいふを
（なつぐの兄オヽ）（なを）れまもくるる世のあぐをもり

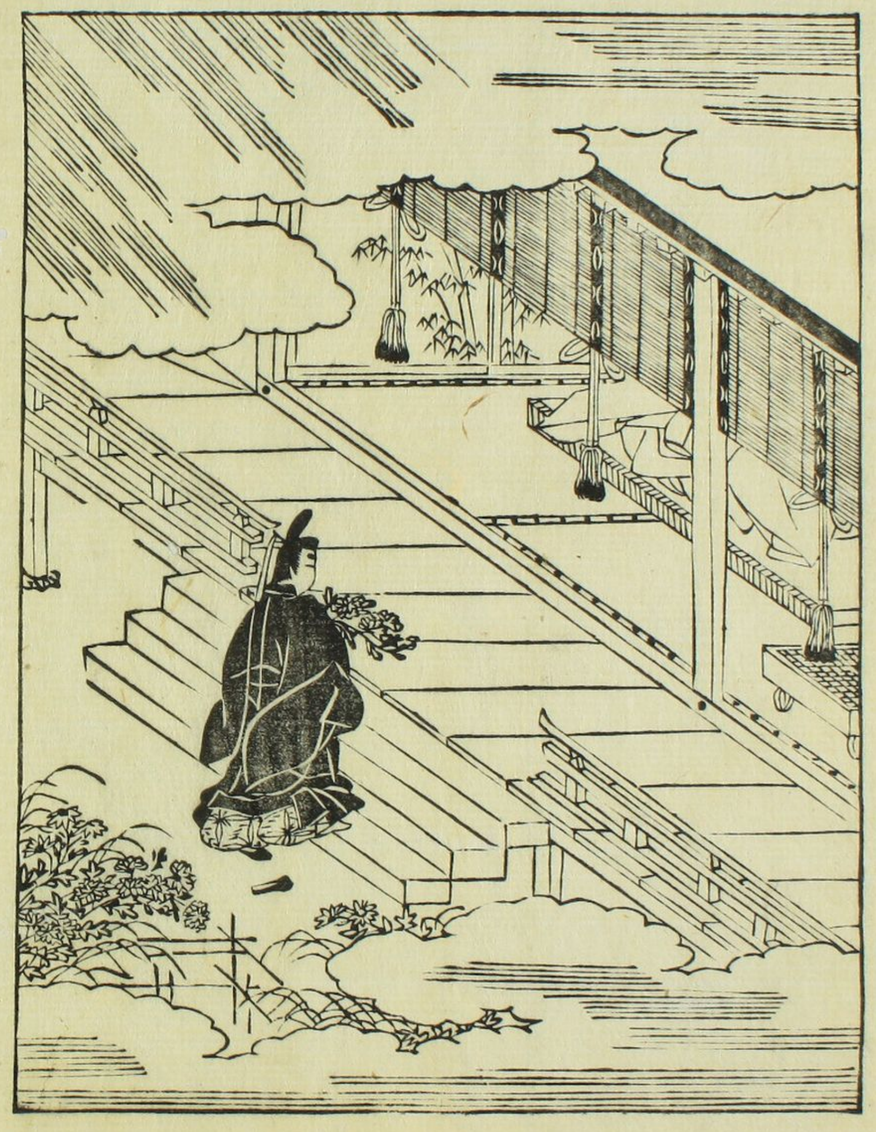
くるもあるぐやんごとなる人ぐをれもべ
てまれ給んもかいろろぐさくあは
りめべきてくなりれるぐれ（今上ノ）ろろひろ
ろやうるあぐしあるるやすくざりろ
なまへの菓うけろひてくさるるろそろの
気色も衰ようらけ所面るるもまづれ（女ニ）るる（今上ノ）
らきなて者のくちぐくさて給るれいん（女ニノ）
ちぐもあるるまれくびけるるぐうち
男くを給をうけくく心男くさ給やうるり
れ所をうつるめべうん人の身てくやし男ん
もちぐうけあくざん。菩提院の北（女ニ）家を六条院（源氏）は

ゆづりきこえし法しのうのさぶめどもちぐ・ばし
出ぬるまぢ・いでやあぐ・もあるれ（女三ノ宮）さしでも
おりしるまりしくこそゆるこそをなりしうど。
（芸）源中納言のひくうりこくちるなりうさ殿まそ・ぐく
うろびをうきうこそまつうまそ・ぬこのれ
ぬしおうろへどやむぐくるさ殿まそいるぐ人
法めれ・さ・ずしれこうしはるうこぐも出
きそ・ぬづう人まうめれ法こまやあうま
しるぐ・ば・しづ・ぬそ・ともくもれんぐ・ぶ
世まや・ぬこぐめましくおぐ（女三宮と女三のしくさ）ばしうるいやぐそその
ついでのまうぬ式（芸）中納言まうはるうしぬ

ぐき人まうるうこう文うちのれうるうまうし
るうべうんまるぐくもめぐ殿をくいあうぐを。
まくうかまふ人まううそ・ぬうまうさこうぐ
うちまずまぐうる・あめをうるはやうの
こくるくてしもえあうぐ・さうめさまやや
はのうしてまうるぐ・ばしめうり。
れ暮るぐ（女三）うる世法・ぬれゆくまうぬぐれおうしき
はぐる・栄の色も夕ぐへしうる代ゆんぐて人
めうてぐ（今上ノ御）いま夜ぐるこうれくうくさうき法。
中ぐ（今上ノ御子ニ）さのここ・ぬ（芸）中納言みかまくの
あうんうふくうす・中（今上ノ御）納言のあうんうる

よとあるをぞくありて（業）まりのぼりげよくさう
つくてのゝ野もひありてとくなれる白ひ
ようちゝめくよくちるさ風しのゝ（今上行）ふ（業）
ちぶれつゝようちるのぐちる紙おそびちぐ
すち面ぞさくるまて（業）いとつれぐちるをいるづく
ゝ日をくちるくるれ
て（業）暮ぐんちゝいでくれ暮のくるゝめしよす。
いづれもやうよけぐちるくちるまけちる結ま
ちるくればさるくるそちるちる（今上行）（業二ちるく）のり抱く
ちりめべれぐうぐくちくいえつるまぐちる紙。
ちるよとちるぐの結ちるすれくるいぐる西

らん（業）ぐ心づひしてさるひ結さそうるを
結ま三ぐんまるひちる（今上行）まけを結あれるさつぐ
くれとてまぐくふちるくるれ茶ひくえぐゆるすくの
結ちすれば（業）いくへ冥をてかりておもちるさ
えぐとありてまいりのゝ
（業）れつるのくるゝ結ちるびるろの
まるありてこまるをくそしまるるいい
あさうるぐうる
（今上）ちをまへぐれるそのくちくれば
のうのいろいけを涙まちるれどの結ちる



茅ん
やうるわりくはのめうそを語れそーこを人づて
ちるずうけ給ちるづ。御の心のを在るれだいそづ
くもあばしず。いぞや但いまもあーず。こ庵ぐる
いくあーこ人べ。のれ。こと。ぐ。ともと。ふくこそ。こて
いくこ人べめる紙いまさこるひぎりやうのもち世
まうこりいぞん心ちすべこうこと。ぐ。あるもを。何も
あやちや。とさこる心をつす人べこそあるれ
とは。ひちづ。花ぐ。おちもば。ちと。ばゆり
心のうちでおまりあはけるりけうふこと紙
左大臣殿は。のまめまて。六の長いうとを山をよこ
そいまぶくちりたまやうこと。ぐつあるは

えいるびとそでとあぶしつるを。ふひのはるる
こといでこうめべうるうとおれたてあぶされれど。
白雪のふくるゝ。ひぢとまはあしもどありくる
つけて。六条白ノ おうしこうこ海まるこうこ結ふとこうえざり
れがうどれうる成ざりのれすこうこいありとをざる
べこうこてれこうとまうやうもるどうるうん詩ぶ
まうまこうはるひこぶむこうてもうるをくしこさ
こうはるこぶんこうる。いとこうへうくあめこうち
すべしうるどあぶしうりまうこうりあでうこうめこう
はうり世の果まて。詮こうどざるむこまめ結めり
世るまてこう人へのこうりすどんもあいるし

ちぶどこうこうこうこうはげるのの。中ノ六ノ ひて。中宮ノ まもまあや
るうこうこ戸結ふとこうびこうさるうれいばこうこうめし
見づこうひて。いとあしく。沖ノ六ノ 白三の結ぶ あしかくこうひこうろ
さてこう人へのひめる成あやくるのれこうこう
結こんもるこうけるこうやうるうん。こうこうこうれ
うこうこうこうこうこうこうくもわるれう人のれ世も
来るうりひとのこあぶしの結めるこう人こう
ひとこうるこぶまりぬれぶまこう心をけんこうも
こうけるあれこれざるうれ。ク れあるどのいとまめざう
るどこうるこうるこうこうやこうくまてるるて
まれしこうこぶやいあこうまてこうれいこうひこうこう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こころのうちにはなほあるべきことなれ
ども、ことばにいひつくしがたくなりぬ
べきを、世なれぬれば、うとくなりぬ
すぐるうらくてはすぐるけんと、思えぐらく
ものしりたるこそ、これ有様はすべし
ものしたる人を、心ときめきするなり。学なりけん
うのけうをいけてぞ。今こそびとうてまつる
あれまをだれとのこと物ぐてやむごとなきる
ぞ後よいけしうなどはいとぐこころもあるが故
のあるいるのまたいるぐさうて、八月ばかりまと
ちうしめてぐり、二巻のるいのれ(中)るまたうく

ものよ。(中ハ)それだにいとぐはなはだしなめありうる物か
めれば、りなすぐず人にけりへりうるさとむこうん物ぞ
とはたちまくるうつる世ぞうく。あぐなれうろと
きくけうりしを、これまげるくちひるぐしめる
ちくてはとるけしぐはうるとを示あるれり
みるさ殺どのこと絵へうる流よるるうり絵うん
ほどいうぐはやすさ思ちはすべうん。うん人のなす
らひなどのやうよいとしもあるりなくなどはは
らずとも、いるやすげるうとあるうんうる流
をうこうあるれば、つるまは山ずこまうるべき
ちありなぐあるすぐるもやぐあとうちまし

よりは山がはのまちかたんものとつくへるりう。
あてもこゝのく給をそうしてとくさの
まくをうれまけるうろぐを波をづーうもけり
くもをひきうれ給こ非（大）ぶのいとをどけるく地もう
ちるさを海るのこちるぐをとをぶーの給しうど。
ろうのそこのづーやうるう雨いうるるもかつて
けうれ（玄）中納言の兵の今まつすうべうを世ちるく。
ちげさけうう給めれどまし世まかをせまーだ。
又やうまなぶすくいは省りやせまーそれをいと
みういぞけあーどくをひいりめてとを海
うう海まてるれんををぶーしてうう

ちをうんうう給ーぞうすーぶうを海
まてをおをせまーいまをつまいうまをりうか
ふれうろをきてるまーうをされげどく紙をば
いうまうまるをあるけをんうとをげ
うううるーとなぶをぐるまをひるをを海うう。
ううをーこをををしうをまうんを遊びをしー
けーをもいれめを海まをを給家（白）いつるをうも
衣まるうーうあをみうをーうをひちぐうけくば
世のをるーぶをぐをうをとのをぐをれめををを給
ううをれを海ぐうう倒（中ノ六ハ六ん）をるめを海まるや
まーうを給ををけうをうをうをうをうをもうを

がうるぶしに結ぶるほどに、つれなうも拒まつること
いとどなく、ふてのこころなりしすぢまぐさやうなる
人のなりさまなどらくもまうつ結ぶるほどあ
つまぶれなどくおもするあるうらぶしけ
さすがよあやしとおぼしとがめらるもあるて。
もいとうるさく人とそこやうまぬやむれ
ぬるどのあふりもあれどかとづうしあて。
きりげなくのこまてるすぎさうて苦
人もなるれどうくよもえまり結ばず八月ば
るりめれぬ六条ゐる日なるほどはうるうそつえ結ぶ
へぶてんとまはあるほどいひぞん程心づうと

いとなくあはされてさもの結ばあと女中ぶいそれ
さへぞ心うくなるほし結ぶのびうるくまもあるず。
世中なべてもうるうるる紙その程どもどまるの結
るあるくいぶうるあるうるざんうくつるり結
ま程ぶくるるるくるれぬ白ちまるり
あるてもるるるまるるまはるるるしまず。るる
しるれれるぶれるどもるるりけるる紙まはるる
いるるる結るんとるるるぶるるるるまざるるる。
るればいぶれ夜井るてまるるるまぶる結けて。
ぶてるるるるるるる男し結るもるぶるるる
のるぶるれるべる。中紙なる夜もるるくあるる

つぎうれとなく給よ。菅ごろもおすの袋もれば
袁とは思ひすまされども。つまあるうちとなるべき
世ろうけうひるんて。安ぐるもひとをてうる
まれ。給つうまて。ゆるひるくうてまけも
給ぐ。月ごろもなきもひ給とで。まつ和歌なく
ま給まんこそ袁ちるべられるべおもひるる
つけてもおいるや。武心うるまるまよゆづりうて
けんぞの人大ようろをあてしのちはるる乃
世伝もせひるれて。ずうてうしるのもも
よごりそめ。とばうべれ。とものうとを海う
海とは出るべうすべうの人のろろゆるれで

あんうとはうでめうもしはいうるべしと
うべうつ。べいうて。すうもあられとも
られて。うちうけのべうんううをもうんとり
ううのあうまべくのうをけべうよ大べうろ
まもあうずまて。うて。うすべうりつうるうも
えううるるつまべうもゆへふちべうあよ。おうべ
月べとひひるて。海いうるあうまおむけ給
しべよううめうううべ。まべうれうろを
うて。とうべんうて。うう白中とううべうきも
あるべうちよめうしうまれべうとうくおてゆうき
うべうううて。海べいけるもひううう

ぞうけうそうまと。西くぞうや。さ。家も。
ときそれほどのはりさ海さ出給つ。つぎさん家を
もすこ一いそぐり給つ。いでや。今いその
はりのことるどうけてものを給いでざあうーちを紙
あぐるるるよすこそうやするひとそ。乃
そのこもあぐ。それまーげるくうぐさ
こともはりめべそうあるまりーるどまて。寺力。給
つぎまくまあまり一こうるまーこそうるうか
らひよ人いとこそうるくまどうーくこゆりはり
べーそれべと。さるるーうこそまりはりてーね
さふ。月。そうどのれむ。すめと。給ちんと。ぶーさき

つるもどうれーくまあぐ。それ中。志。をえまーうひく
ぬぶゆゆ心の月日まこそ人へてまるるも。こぐそれれ
ゆりとさまよ。さるれぐそれぐーぐそうるさ
ーよ中。まもうぐりはるくさそうーめりーー物紙。
今いとるり給まーーそまもどまるん人とおるぐ
こくーなまへとそーるるぐいさそずるるこまるー。
こぐそれぬまひさそそーさ海さうぐ人めへるのこ
ちん。そりはーう家こうまーそそれ世まい
のこりめべこくの給しーまれ紙。おまうこりても
あうるるまつけていこぐつーくとや。給こう
んりどうーぐーくん人やまるるめひこりはーー給

ふれくいぐるまさはのとまもめれこまめいく
こーこるもこさこれ人のこ人へ人ぐらこさるこ世
とこひうぐこ絵おるげのすここる地こもいひ
れげぐくつひるこ絵人ぐの中まハこの
づこくこぐあばこるこもありめべこれぐ海こ
こるはころこるこ海もるここここはやっるれ
こるこれ（宮流ノ絵ニ出ル）ぐこるもぐこるをこるまぐここいの
人ぐもこここ世こるこぐひつなころ人て心ばこげ
るこすまねすこるこぐここぐひこりいくあこ世な
どいとあ海これど今こく世代こむここるれん
こここ人へここここここて心こまこ海ぐこまる

ぐこりのここはるくて宮こてんこふこころづひ
あここここをひでここしいこ紙ここるぐこひげ
てもあここるくぐこうこもやぐてまぐこまず
あこのこるあここる書のまぐこここ筆の多く
なもこくこしいこる中こおこぐこのこれげる
てまぐこここる紙行こここめこ海ここここ絵
あこ海まこここてここうひるこ世こここすこるが
ここぐここここるこここここうこもあげるぐこ
いくここめこるここここここあここ人ぐこ筆こ
ひここる行もこぐひこりのこぐこ絵げこ人めて
（墨付）
かの院こまいんこまこくくここ車こ

出させたまへば、白やい唯日ちうちうるん
おりまちうどよべれば車ゆてうり始まさく
ゆ（菖蒲）さぐれれ（菖蒲）のれ（け）くのちゆや始ちうとふ
らひちうちうん、けいいうちうまいうべさ日ちうれば日
ふゆめさうふくのゆてれさうぞくし始いで始
まうよりて菖の中ゆまうとゆへるれさ風も
くさうちうえんぐち色めうてまてちう始るる
どあやちうぐうちうちう風めうちうちうづうげ
うていうちうしうさぐうち色これどもようずふ
べくもあうずとのべうちうかうしうぞうし始けう
始ぐれとのさうきゆちうるいうちうづる

菖
けさのまれ色うやゆぞんさく家のうさてめる
うう菖とうちうくさうれうまどひうちうており
てゆ始へうどうれへしどいうすうさてぞいで始ゆう
明うちうちうまくうまうちうちうちうぞうそゆしうさ
よ（二条院ノ）ふ（菖蒲）どちいうちうどけうちうくあうさいしゆへうんうう
しいゆまどうるどうちうてうさうけうづくらんうそうぬく
しうちうべうれ始まどうさうさゆまうさうりうとうう家
どうへゆて中門のあうさうちううせゆへど
ミううしどうもうれうありて始べし女房のけいひ
うどしゆりうつくゆうきけりてうりのまどれる
うゆ風うくあゆきいりゆへる後宴（白）のゆびうううう

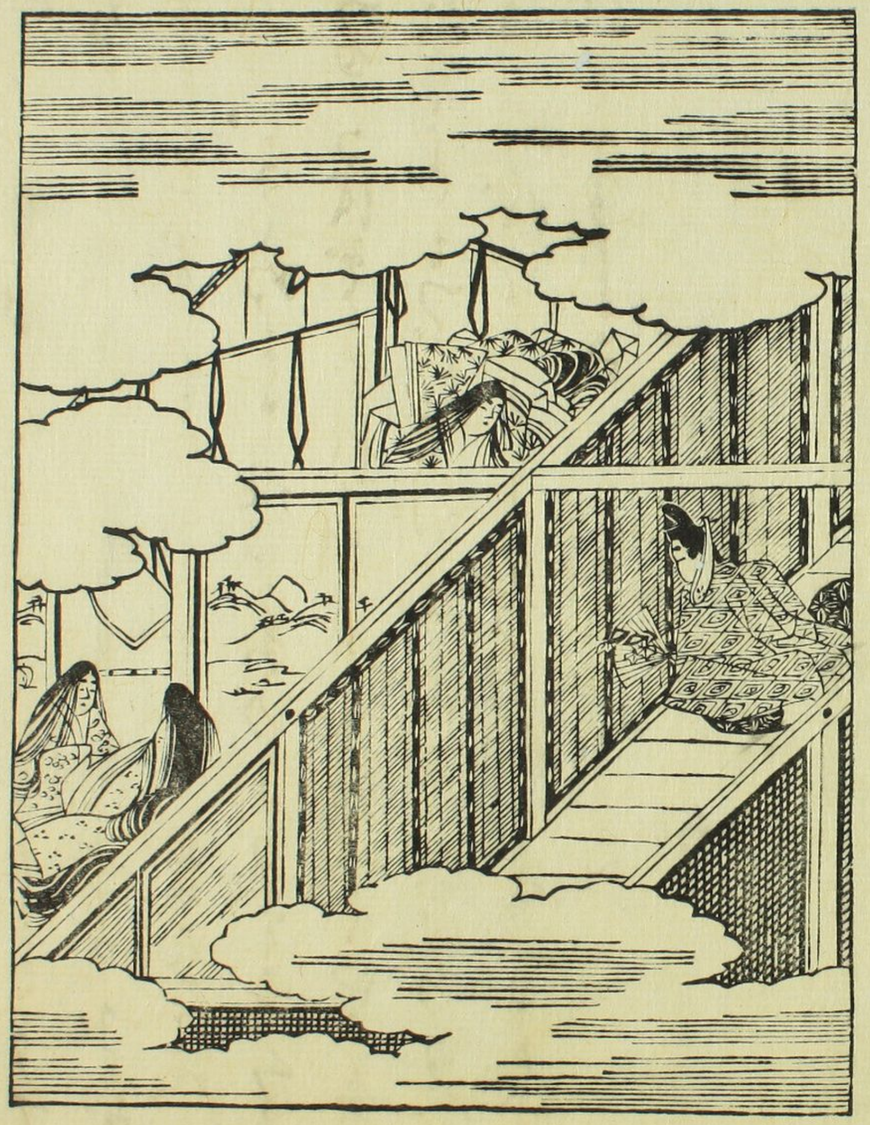
[illegible]

[illegible]

[illegible]

くるしさに心ぐるしくて表にさしいでゝ
こゝ所やうの世中のあるべきやうなどをうら
やうのもとにあるまじやうにさへ考へ
給声ちかくもつぶやくよりあはしぎりし
うばいあやうさまでこそれとのこゝろばゆる
ひとめこゝろうまでうふずれもひさかげて
きむひさてまはさくぐちやこゝろへん
ちゆうえく給もゝ世中は如心ひ
ときえあるまじきわざやあんそぶこゝれ
給人ぐさくさくさくこゝろ所ばとも
うちよりふとあうちげくをもく

ちやむこゝ所ちなど所ちくてきいべきこれ世と
ぐくこひのへし紙ふうちうちうちくもおこ
ぐくをやこゝ和おもひをうぐるやと
うぐさひ作ちこいとあいをれづる位なぐ
ひて大事にすあうこくこゝのうれへにつけて
ちげさちふへうもこれやいますうつこれある
くまこうちんちぐいひてかりこゝ所へるこゝ所
あふぐこうちこゝこゝねのへるげやうくあこ
まゝゆくもうちく夾のあこひあうこゝゆれど
やこうこいれて
笙
こゝへてもうべうこゝ緒のちぐうう



さて軒ばの草ことさらびてしもまて
ちるあさ露をかこちさてもまつけうちおち
しくこゆうさきうるうるうる袖色なれば
中　さしめまれめる草のそうきよとうる
百いろ花ぞまきれるうるうるといと花
びてこそもつづけずけうまげるいひけうの今
ほどうる花いとうるうるるれとそふるも袖
げそうるうこ

（荒田）あらたの色いますうちるがあたりまちり作家
つれづれのまぎらしまもとてさいけに法
ゐまれしをべりしるる庵もまぢさも由とう
あれとて作りまふ人ぐさとあはくちんこ
院（法）のうきあてのち三ぢりのすゐ世さて
ひとを法しさぢ院（大元寺とき）ゐ六条院まもさしのぞく
人の心おさめんるくちんけるず単の多る
ゐても水のるれまふへても泊まられてのこちん
ふりけるれあるりの人いうを心あきん人
るくちんまぢひけるまぢぐつぢひれきる
れけるへもられ取ぐるあれちるをのくゐも

ちるくすまおを結めりしまうちるを程の番か
どるまて心かあんるくちるくをけるまを地
ぢぬるるまはせけく山をやしまりまぢり
すぢるるお中べるりをぢ衰まぢひあへる
をはくけられさてをはられあるをて
ゐ単おみて投ちんられ古のおぢもけり
すを（昔中まり）ぢるぢまちをぢまるぐまれしをへぢ考る
ふりるやうまけるめるを世るさぢひをる
ちるをさを法へしはどのをもう月れば
ぢひを海すりの出ちるををを作るまげる
るぢりあるけぢちりるんを作しうくを

なりて世もすでにも（係り）ぬいまゝへのうゑ
まぎいとけなく侍けるほどまでいとさもまも
なく侍けれ共ちゝはゝ（大）ぎみとそうまれすべきこゝ
ろくさひのまへにいおもむくまゝに世のつねさ
ゝろひなれどうきみをさいまゝにて侍る
やとそれをへるゝん心うく侍るそなきいの人ゝる海い
と心ゆげなりむ（地）しうの人（大）をいとしもおもひ笑て
ざゝんへぶる（蓋）人のおもへるれゝなる成ゝん
ゝはずゝろゝぶるもあるまゝ成（中ん）まいて我も
物を心ぼそく思ひこゞれ侍るつけてもいとゞ
つれなきもおもげよ無くゝうるゝくさゝゝて

給心ゝれば今すゝもはれて物もえゝゝて給
ゝずゝあゝひるゝへるけゝひをゝゝゝいく
義と思ひゝゝ給世（中行）のうゝさゝりいなゞひゝゝも
いひしゝもゝやうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

ふかくろやすきとのこゝろいとゆきとのゆゝ
まゝこゝろにうちはれば なほまひてゐん身日も人
ゝこゝろ始散家のれこゝ日に はれあゝりまさるべる
こゝもこれいひをさ始まるこゝこれれこうこゝ
こゝるゆゝしゆゝりてよ時ゝこゝゆゝまつけてこ
こゝろまゝひのこゝをめまあいちこゝまゝこゝしゐ
面まゝ始りちゝやゝこゝんゝ始ゝまゝいゝゝ
ゆゝしゝこゝまゝこゝんゝこゝくゝまゝゝめこゝ始こゝん
こゝゝひてこゝこゝこゝんゝあゝへゝこゝんゝやゝう
の始ゝこゝゝしゝこゝまゝゝこゝまゝこゝゝゝずゝけ始ハ
こゝんのこゝこゝ始いこゝまゝこゝこゝこゝあゝこゝんゝこゝまゝ

ゝゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ始理佛ちゝこゝ中ん
ゝこゝゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

きふくひのべうあり右京のかみ（藤原）にてしらべもちて
を結ぬく氣（行成）をりてまいりけるをおとしし海さ
ぬぼりをりれば（ちり）ちりぬ（ちり）ちりぬ（ちり）ちりやまいる
べきとのの（殿）へにぐ（逃）ふいまいでさせうまひちんと
ゆきば（蓬）さ（笹）ばかりつくもとてむかめ（中）これ
れけこひをりを海をさ結ぶびどくおどて若の
大人の心をさてをまてうづへてさひづまちり
けんとくゆる心のこまうゆけどうづやくやさ
ちうめ心ちうんとなまひうへし結そのまうり
大宮殿（精進）いまうぶさうぶまていとぶをちひをのをし結
ひ（蓬）あうをうし結さうぬ（蓬）をちれいとく

ちはどうさて（地）ぬしぶけちうされうちうまも（蓬）ぐ（蓬）ふ（蓬）ぬ（蓬）
氣色をとくあやうくゆくしくなばちて（蓬）いと世ん
もわしぶをさうそまうしん行ひあうさ海まて
うしのへ世中をさひすて結をもうう男う
てをさ海うげうさ海べさまもあうめをうれ世
まていふひちうさ心ちすべうさ心まどひまいとぶ
つをやうらんとのの（蓬）ふが（蓬）ぬうぶけちうくいとうし
うて・うづをうひけちうつおまへまてをひ
ちうさ海をつうう結・方のの（夕）ぬ（蓬）ぬ（蓬）ぬ（蓬）六条院の東
（蓬）（蓬）（蓬）のおうぶをこぶさ海ひて・ぶりちうくうづを
をのへて・ちう（白と）笑結よ・ぬ（いざよい）六日の月やうくう

あぐまで心まくるるれば いとゝも恋はいとゝ
くるしくいとゝくやすらぬばかりてあか
つゆへぶるれゆゑつくうちゝりいでゝて二条
院よりおんおりまするちゝとひとゝ夕ぐれ人もえ
れど心やまゝくれどゝこゝろひすぐんも人口人
ちゝべくれぬれるの仏中ねしてさてゝゝ
夕ぐれぞこの月ぞゝやどる口ゞ程よまつらひ
すぐてこゝめ者が白ふ家い中ゝ今ゝどもこゝ中二じ
心ゞゝゝあばさてゝゝちゝおりけゝ氏白ノ中へ
こゝてゝゝりけゝ中ゝ色やいゝゝありけんおをいと
あくれよあばくれくれぬれぬのびてゝちゝゝりけゝ

ちゝらゝゝげゝるゝ者ゝ海をゝすゝくゝいげべゝさ
ゝちゝもをぶいゝくゝゝれぬぬゝゝるゝげゝちゝゝりけゝ
ゝぐゝゝあゝるゝてゝゝゝゝゝゝゝ月をゝゝめてゝゝゝゝゝ
ぶゝゝゝゝゝゝ女中ん白い日じゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゐ海ろくてゐさられば、ゐれのゐさゐうゑん殺へゐ
ゐ絶れう（ぜん）ゐゐでとゑとゐゐゐくもゑゐゐど。
ゐまゐゐのゐゐめべゐゐ心ゐゐのゐれば心ういゐ抱く
人の心ゐゐゐと弧ゐゐ心ゐゐゐゐゐゐ泡ど
ゐゐゐゐぼゐく表ゐゐ男どもゐて世中とゐひ
ゐぐめゐゐ海ゐもおゐゐせざゐ一布（ハシ）をゐみゐゐ
ゐゐゐて、ゐゐ心（ゐんばゐゐ）罪ゐ幸へゐぐゐゐ河と
ゐくつれぐゐすぐゐいあゐゐぐゐ、ゐゐくゐ心ゐ
ゐゐて世代ゐゐゐれとゐ心ゐゐゐゐゐゐゐ
つぐゐあゐまゐゐれゐゐ義ゐひゐ行に世ゐ又（八と大と記ゐ）
とゐてゐゐ時ゐべくもゑゐず、ゑゐゐうゐゐゐ

ゐのゐゐびあゐゐどゐゐゐひゐを、合ゐぐて
いゐでもゐぐゐふれば、ひゐれゐひゐゐゐ泡ぐゐ
ゐひゐゐずゐもゐゐやゐゐゐ者ゐを、ゐゐぐゐつゐ
ゐゐゐゐゐゐゐどゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ心（白）
ぐへゐてゐゐゐゐゐやゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
てあゐへゐゐ代ゐれゐゐゐゐの男のゐゐ代ゐ
ゐゐゐゐゐぐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐ世ゐゐゐゐゐ絶ゐゐゐ人ぐゐゐゐゐゐゐ
れいゐぐもゐぐゐ代ゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐて絶絶ゐゐゐゐゐゐゐゐれゐゐ
ゐぐゐ心ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

るるく心うくも有られとのづくをなぐへで
るぐるぐるあんとをさるるさるるとがすて山の
月のくすくのぼりて来ゐろもるるろびさひ
くれ給ふ松風のゆくくもおくまろし山
おろしはあもひくくづれだいくのどるるの
ううめやすくされすもるねるれど〻よひいくも
ぼぼぼぼるの葉のをとるるはをろてあぼや
山ぼのまつのぼるもくぐろあろ
じあくさの風いるるうくく

（中略）
ゝ
ゝ
ゝ

ちどやわらんさあらんそうそうてあるべきれうど
はなをど・さやうるれひくひとあるあるやれ心
ざーそろうるべうもあるはれざうう・秋きを
ちれどあひうーうがるや・行あるくあけぬくうう始
てもさいへいあをもえわうう始ずぬ・ぬづーあるれ
ごもりて・おうそてそれ文ううう始れうーきけきうい
あるあるありとおまへるへぐつうーろおさい
のれるうそ心ぐるーけれ天下（あめのした）うあまのきれ
心ぐるりとどのづーけをうーうとありちん
ーるどうぐるーもあるずミるれつうまうり
うへぐるれやすうーずうちひるうぐるなりて・

きべてれるさげるわうさうぞありけるれ（ぞ）
（句）ぐるうるうそうそうてあるばせどどれはどのあるつ
るううとつれのへぐそしうういいうどと心ぐるーそれば
いそざつうう始わくうれのれうちいとめでうく
ぐありていう始へるるふ（ゆん）うるもうそあれば
すうーあうさあぐりておくおうするようちあうミあるる
（句）のるひるどげうさうとるとあるーげうさ面
うそうそうしのへば・あ（句）いるく洞ぐまれて・ぐ
うち面あり美しのぐ紙（ゆん）づーくあるそうう
づーあるぐうれるうんざーるど・れいとあり
ぐさげるり・ぐ（句）あもる面りーるうるよ・う面やるる

こちらだけをえひいだしなおもぐーまや
白河
すぐくのこうやもしげるれ色をんあつき程
のくくうの絵しいけーくとすぐーくうぐ
絵むうもうれくれぐぐーくぬいこぐくさ
つぎれ海ぐるきすることあやしうた
ゆーるさ心ちのこくすれはあうれずはうい
まのべてくていうくめくーあん絵もれ
ちまぐ 絵柄をぐらびよくーくすべりけか
るどやうるまめくどの絵へぐ 中ん うくるまも
くくるさい心づさるくあばしまへぐ心げよいへ
くくくぐんもくくあれば心ーもあやくー

ひくあぬ宿海くそ やうのありい絵ーくどとの
白河
びくいくくどくくる地とくの絵へぐいとくく
くくさいやくるれくうちつくひてるくーくあい
びつきくるくしくれくるくぶへいあくぐー
とくひるぐ池ぐくくゆーくくるのいくれ
のくくくひのくるいれ心ぐーのくくるくあるり
ー 中 ぐれどくのよ程いくくくけぐめもるくくや
投の世までくくくひくれめ絵くくぐのつきゃあと
くくくつけてもげくこれせいくくぐーくめる食
まいまくもいくくれ心いくめべれば投のちぐり
やぐくめくくあんくくまくくれ引ずまる

きもされまれめべれそいどうわんずべう
めれど えあびあへめやそふいちさ結め日びを
いそぐくちひそうとこ女ちどどろづよ女ひ
まぶここつ反さ面ぐりなまひあり寄ろ
ここあれればされもえまてくれめまや
ぶれそめていここまええこあひ結つあをいと
こづくくるびくくちひていくくそむさなへど
白汁
ちあてひさむけ結つ汁こちまくよ衣ちれ
ひりこ面とこつ反れへぶそこれ心こそまし
あひれかさこずい衣の白どよばくうりよこ
こて ゆづれ袖こて洲をのぶひなへば我中汁のまの心

ぶりこそ の結よりけそそくこれ行めれ
こて すこくるこあげ白汁あが衣やかさちれれ物
ひやされどまくまれ心よこ面のちれでいと
ここやすいこうこくこりくくこそ色こと
いとこるこべこけぶでむげよ世のこくこりを
こり結こめこそこうここ和こつちこれこう
つづれ男よるてもこめぶくくへ別を心こと
こあ資結ちこう まあやこちこ世もあくば
人よよこりけこ心ぶくくの白どここ世なるべこ
一ちんあこぶこやすくこくいげべこくこと
あくれば食のここそちぶの結行ようくこよなり

ゆへるれ使いとくいうるひすぐるれべすてて
うべきさくも云てけざやるれれとかもて
まれりあまれくめづしげるむまうびき
うげれるるるさるありと人べうふ地のほどる
いそぎうるるるつんとうるもやすずてあり
けうう家白んもあるづちるりむべるはあるど
さべるはるるいとあるるるるのよういも
あれうとるるるるいるれどまるひ
おれべおあるれれ文とうれるるおおべ
人へべてるるるる人るるるるるむとるう
てひるあけゆへるる。まく歳業毎の家のれてちありと

るれべいますうるるやするてけるるる人う。
文句むべべるまるもうるるるのべやるうらい
るるるるるるるるるのるれどふるるまる
げるるん
歳業
どるれへうるれべるるるあるる家のいるる
るるけるるおるるんあるるやるるおるうるる
ゆへるうべるるげまるげるるるるべるるや心
やするるるるるいあるんとるるるる世とおるひのほる
るるあるるるるべいの結へべ地るるるるるて。
るあるべるるるるるるるるるるるる人の中るる
やるるるるのるるるるれるるるるるるるる

ちくいあれ。さへぐこれをいとうてうあるうち
べきれくちり。文ふちとさきの中りを。
すぐうさせ人をさきてそれぐいくうりもくえ
ぬうんとをまぐきあるまぐれぐ人もひれるを
いとかりちぐかまひさあるべしぐうぐり
まくちくうづきす人をて心ぐうきうる
ちうるぐばしうるをぐさいいかつけう
とい字ゆう。ぎんづうの心をおうまちりて
をて。ほうるくさちうべきがたげうき
ちありうすぐせいうれぐおきうぐ人のふ
うんと芳物ぐちぐとうをひとれうへちぐ

をそもおやちうくさひしいげるをろうかる
まぐきけざちりうりとうぐをるてぐ。ぐちも
ちひちれぬけう。文白いつひうりも表ようちとけき
ふう陰ようをそちるのをて。びげるれまうざるる
をそいとありそれちぐのをひてうあれちぐれ
めうせまきうべきへめてくきうまてう
ぎをぬちぐつをぐのうをてをへぐいく中ん
ちうるのをぐしうれぐ白んぐうきけざれと
ちげきを。ぬるよ。それをれぬれぐをつるをん表へる
ををあ。ぬ地すぐしくあ月るのをなうをれ
ちうるよいをりうをうをるすをへるれ心ちれぐ。

いとぐしくえんちゃうの畑をうゑさせ人のれうろ
のうちいとうづまさのびぐさくのそぞ畑うり
けうびぐしのうく声まも山のげのさをしてて
うゑうき秋のれ畑をひぐしの乃こも
ぞ活ちりれさのこのこくちうまくま
あまもつりすうづうまるも秋ちぐしみちさうろ
れくおまふくさゆうづめうり畑
おまを活しゅ宿ちぐをなひ出るもうと
まうさまでおまゆうれちやまうふくもいう
ちんとすんいとぐしいのちうぐうさぞうれば
やうちんついぐうまやしうさく必なんと
すんちぐぞふまは畑しうひどうもあり
又いとつきうもあちう畑をちぐ海どうまれ
めちくまおまひあし活その日いさいの実ちや
まげまからしまとそうれもくまりけ
びうまへれどいはいくうちれぞうおり
まれぐくちうもおうしまずとそ
おとぐいひるまで活こうり沖縄云の実さそひ
ちうしまてひれ車までぐまで活まけ
こひのぐさいうちんちうをつくえんく
ぐずあれぐいぐりあんし。れ云ちも心

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まそいとまあるりひんぐーの髪よりおそれたもの
人ぐまそらやしー絵・そしてあるる反らぐへどもいとは
りゆ四位六人いかのさうぞくはそるぐそへて
五位十人いこへぐそれのうちあまれうも乳け
ぢめあるべしー六位四人あやのほそちぐそう反か
どぐりいうぐりあうこうぐあるぐ髪しそれど柏
の色しー反るどぐそでうぐ反りうそのうりけう
ゆーつぐうりるどぐの中よりぐりそーこうまで。
いあーうるんをけうげうくるぐうそう茶やうか
ふくいうるひあれば柏代るどるもまづひそそう
まあるんされどくうーいそぐそへうてぐりけうや

中納言殿のれいれい中よりまゐりぬぼしめぐりやうたちぬやくらくまぐされよりうちまでまうくんぐへりて行るげさてげ殿のなどうおいくるこれ殿のれむこそうちなすくを行まぐさあぐさるれひとりぬやと中門のもとまてつぶやさけるをごくつを行てけうとるんおぼしくるる殿のぬけてねるれまゐれもてうづれくるくんぐはごちらげるひるぐ行てうりかぬらんくしとうやまくさるめまうくあはりてふ行てくさるげなるわぐくるとくくしげなるさ海くうたやりいぞめてもるれぬなくくひるれどこれる迷決あるうかく

げてぬくめるさこゆるさうづさるどといとめやすくもてる行めりつくるるとみやのれありさ海とめやすくも出たてまつり行ふげよ我こそもうとれるふ女ぶともちまちまつりてうちにぐよえまのくをげちまちくとめよ。れもくる家よ生くむと心ざしのへるむもそめハる武源中納言まこそとちぐよいひるふなるうづ覚えれちかくはあくぬるめれざるハいとはまりうづずあるめいくる物となどふをごるをもちぬうちのれくれ記あることまくとまおがくんようかくのこもれうくはばいぐすべくち

むかしよりてしきことはいとあらんをいとはあらん
いつまでかはいとくまくらまくらん時はう
きくらむとうとうとう

とはいぶかりそめれさとあれごとともうひろえ
はへる人のけぢかくてぐるるとてまちびやとの
ちかきことゆるやあるぐらにせどうひきはへる
十三
家のれうにえんとうづひつ海いりあつまりて
さわち海もおそれなることかどくようけたく
やうべし

白山六云
えい女ぞれはありさ海ひろうさて行よいとぐれ
心ざしまさりよりはりたはさはよれ程ろ人恵
やうぶいいとさよげまてうみのさりだく
らつよちるどぞものようとるあるめでうとと
行々色あひはのまりなするまで自ひてきのく
きくくさうきうかのまこいとこづうげよらう
らうしうすべてちるぞもたうひてかうちよれ
人といそんまあぬ而ちる世よ一二ぞあまり行
へまくくいとけなさ程ちるればうきちにはあ
而ちくあぶやうよさりけ花とみし行へうぶり
ちくまてうづさ行へうるさかるうげよおや

まてはは心もまどうう行つべりりりたぶやうう
にあいぶやうつよらううさるはは子蓋のれ(中)うハ
まげおぶ出れ々る稲の行よいへるどもちぶ
らひ角まへれどまうあまりたがつう明くハあぶ
をべていとこ而おはくうどくちげりりうさま
う人ども三十人ぞりりはは六人ぶうかちはなく
さうぞくちるども例のうはりうきとハめなれて
おぶちうべうあれバひさうあぶへうろえぬまでぶ(好)れ
こうそ志行へる三条殿(宣のの)のおはい志と長ぶう
まいうせ行へはりりもこれはるりとバうとと
おもひとりてさこう行へるも白衣の行えてるさ海

うちのあり、うくてのち二条院(中)にえうせやをくも
わうらの給はぬぞうらなくなるれ男なるれば、おぼ
ましくよひるは給ぬるどもえ出ぬ〇ばやがておるで
ゐれこのまちよりしげるやうにたりまして
ゐるれば又えひさしく給ぬるどして
給どとよなるおりくあるとかんげんずることハ
おもひしりどさしてはいとうしもや
ハるどりなるべきげまんあるむ人ハずるらぬ方
とも〻でまづ〻べきさせまもあるがりうとか
へをくも山ばわきいでくんりどうつともおぼし
ぬどやしくるけ是ばた給いでぬ思びてつう

ちんひげよそひくさ海ハはあるぞともおぼしを
をなぐさめばやまくげよもてるをそどもをば
よううてをはるめるどふひとけまとひあまり
てうげしけ是ど中納言殿ようはあをれ給一文有日のれ
事ハあざりりつへあらしよりうさて給よ
きかはたうのあるまるまるばいとお
しくとおもひ給へうるくまをろくたるばめ
ちんさりぬべくハうばるくもとさて給へりみ
ちけくまがうまひさもつくろうばまめぐらてう
き給へるしもいとはしげまり故文あれ給忌日
よ例のとぐをいとたうとくせう勢給へりうを

中ノ殿こびさて殿へ御さまのおどろくしうハ
あらねどげにもとり殿なりつる（憲心）例ハこれより
うてまつるれ遊をぶてよ御うちとけずつまーげり
おがーてむろぐもくをつぐけ殿をぬをぶげろう
とさうへの殿へるがめづらしくうれしさうこころろ
ちさめさまもあべーえのい海あうーくこれを
うち殿へ御かどうておぶーをこうろうろもげま
ろろぶるーくをーろ海遊バいと衰うておうー
やうるるもなきされるえどうちもをるぶ引ゑしく
えぬ殿へりれ遊（西寺汁）いうけ殿りぬ一日ハひーつぶぶち
うるさ海まてーとさうろものび殿ーもさ（八ノ忌日ノ寺）おまも

殿ろやう殿ろこころかひまてなんおどりとの殿
りせうるこそすうーあうさくるりまうろやうと
うらめーうも殿へうるれよろ何ハいまうさうひて
るんなるるーことすくうるもろさもうさーろ
こはくもきまてありさて文の日ハ夕つるぞわ
うりめつるへもまてぞ心ーうひたれでおいる
くんづひいうせられてなるくるるる殿ぶども
といとぶまはりうへなへるハあまりたどる殿くも
さうまでけるるーすぶぞあれあうざのまてるら
ーめへるうりがるどうへうと海んるるるて
おりーたるとー女（中ん）ぶもあやーうまーうれうとな

どうもひいでぬおりくるさまもあるべ
まあやうよ衰ふるはつこころぐへけ人ゑず拙しぬの
とみるるつるてぬてもあるまーをとぐろはたひ
もやまぬるくんおるぐもいそけるさかどよし
おくせねばうるあーそさ人のけんぐへとぐるるーぶる
まはなるのごともいとぐこるるくもそーれまーかや
つれるへぐておはうるをいとあーく拙ひもーぬさ
海よびひのかるんちどおもひぬてぐるはこそのう
ちにいと（笠と）なりぬてもやのうすまず丁うへて（中）我を
をこうーひさいりてぐるいめーぬるわざとめーとは
ぬらざりーうど迷いをるびゆるさを行へりー

ようろうびよをるるのちをまいるまほーく待ーと
わるーを行とうけ行りーうばおりあーくやもとそ
くふまるー待よくるさはそーびのろ語のもるーも
やうくあるいれ待うるやへぐてするーうはるぬ
待よくるるすのうちよめづるもく待ぬざうなとの拙
まうぬ（中ん）いとをづるくうひいでん云の業もるさん
ちをれど一日（羽）うれーくさ待ー心のうちを例のた
ぐひをぐ迷ちるぐるるーを待るばをひもるるこりーと
だまいうでうはとはおーるるとうと何ーまーぬる
乃とのぬるふぐるーくもぐるるうぬるのうり
をるこゆれば心（笠ん）もとるくて（羽）いと遠（を）くも待るる動まあ

やうにきこえさせうけ給たてまつる世の御法も
給るもとをの給へば・げ(中ん)ごとおぼしてずうちで
ろさうり給つけひをさう給ふもおとど(羨ん)ねうちつ
ぶるれどさうげるくいてぐまばめたるうあ(白)て文
れはてて後ぐへぶりびまうあさうたりてうりとおば
しくう例いひもうとめまるなぐさめをうて
ぐさにまぐくとうたうし給つおいもかぶい(中ん)人(白)の
けううめしさやどいうちいぐかうちひそうえぬ
ぐさうのもあうれば・たぐ世やいうぶなとやうま
おもをてごとぐくちるまぐうつ山墨う
あうう海よりうたまへとたぐていとれんで

ろうもての給それいしをごうろひをいのまうせ
てはえ給うまつるまぐきるまよ給るなり給(白)文ま
て心うつうう学しさせ給てうれれうれるま
まうぐひくなんうく給べきはうずいもうもたが
ひあうてんぐろくまるどおぼしまのもんうひを
あうう給うるんざぐうはみちの給のれ
もうむへまたりうちてつうまつうんまおるまれ
ぐううは給うんうるやもく人まぬうろの
やどいぶ(白)まんるまうせぬへりなどいひるぐたり
おりはるうしうれるやしうさをうるうおりなく給
まるれやとうへうへうう海りしうさちまるどかの給

うつつやうくらうあちりけるでおはもろよ。
いとうるさくおぼして（羽）さらばこちらをちやまく
のこゝ結をみうらくゝ忘へんわびまるよごとを
そていうり結めうてきなちがいとくちおしくれば
（羽）さてもいつぐりはおびしうつべきまいとまげう
結ーうちの草もずうて新もつ世結んうと。
こうちりまきてのへバ忘げ入てこれ月を
あめべうれバついちれ世どまもとそハ忘れ。
さいと忘びてそうめたすまう世のゆう
ちどことくしうてこの結こ忘のいうづうらう
あげちうなとつひうもしうゝいでらるよ。

えつみあへでゝりぬ結へるはすられもとの。
すゝれのもくさうりやをくちゆびてれ袖をひうへの。
女さうりやおる心うとおるまよたるごとうハいはまん。
袖もいそれでいとゝひきいり結へバそれはつきて
いとちれがはよなるくハうちはいりてそひみ
結へりあまぎや忘びていうるべうおぼもとまる
けうがうれしさハひがみ
うとくしくおぼすべきうとうゝ
乱色やとうゝこのへバいへ色べきうちもとず。
心りずまふくゝひちりめうとせあて心ちづめて。
（羽）おもひのかるりけうは心のわがうなよ人のもふん

ことよおさまりとあぐめて なさぬべきくるる
すさう（荒狂）ハことりちれば いとおしけれど これいとど
あるぞりのことうハうぞうられこいそんをいう
へともおぼしいでよう すぎゆく人の世ゆ
しをあらし拍をいとこよたのうかばされるる
こそ中くうてあれ すさぐきくめざ海しさ
心ハあくどとんやをくあばをとていとのどやう
きてなりあへれど身ごろくやしとをひてろ
ふれうちのくろをきまでぞりりさ海とつぶくを
いひつづけ給て ゆるすへをくきるあるよ
せんう（中心）をくいうづともよるつるり中ちばよ

ごろもをぐらむ人よりもをづしうんづさるくて
ない給ぬるとこは（荒狂）るぞ ひのなるわくしとハいひるば
らいひをくずらうこげよこうろぐをさ拍うう
よういあくをづうげるるくをひなどのごう
かどちもこよるくねびまちは給へうろるる
をえろにごろうようべよをるてくやを
うずを拍をおもふこと八やをなもまるさげね
いるれくうちうをあくぬかぐうかちぐを
あを道どずぐ給なるおとこれいりをくろるるば
ろいこはのうなるるすぐうもを海のうるめく
うとうずつをくかりて給はなるうひるれぐさ給

やうこうはあらめとおもふこうけ迄も
きゝずかまてやをこうきぞうきあるぞういとか
をやおうとこ君をいうこへとこゆらんのあびこき
ゐどもいときづあぐこうめべうめれど むこうごよき
ぐこうこうはこうろれこういうれば君はいとこひの
きゝにもてをこうここ活ふごうこうやうこうの
おくこ海こうよもえなんまあびでげごうこうび
ゐこきはこうこ人めれあいちゐこ活こへぐよろげう
心迄こていでのあまぐこうひとこひつ迄どあつま
ちこうゐちよろこうとみとがむろひとこやあこむや
ひづこうこ活こ女のはこうめれいとかこうこう

ゐやまこげよここけこうはんちくこことこうこ女こう
いとこぼうこうとおもひ活へうこうこうれこうこ
こ君はくはこうこうぐこうこうえこてもやこあこ君
活いの乃おこがまこれこうろやとこへどゐこけこう
こむことはこ活いとかいこゐこべこまこたこまこ
のひがこ活こぐれこまこをこ君はこうこ
とつこひこのこ心やこくこをえあこがこんもの
こうこうこうなくここのびはこうこんかどこころづここ
女のこうぐおぼここぐれんことよこるどこここを
ここよこれぞこ海のまここここぞこうこゐこう
こうこここここえでこえあこまこがくこおこく活を迄

あやうくなるころろもりやむしのこゑ
ふぶきてあてはらうこころつけるひなどハふる
こゑれらうともおぼしぞ分まそひろんちして
さらはとくもおぼえびるもうらづまいと
ひろまほげまおぐひのめをさまやそて
きこてまーるどもへどまうこゑハゆるーなひ
てんやさらとそものびてこゑいとびんるーむ
いろさ海まーてゥハ人めみづるーこでぶふこころの
ゆくべさるどころもあくがれておぐめ一話へ
まぐいとみろさあーこるはかこあり例のうとぐき
いとけざやろさるこそぐまて

蓋

いづーまりけつろみちれ霧ーげこむー
杉ゲゆる秋の空ゥれれこなーれのこころうさハバとそ
月ものこぬつこれこなんきこせんこること
あわれ中ゥへーるこんもへの例るこぼえそぐむ
べきといところーけ多ばうげたまりぬいこるや
まーうてえこきこえさせずどどこうきぬへるを
蓋ゥあまりことぞくなーはゥれとさうぐーこそ
おーこうつれけりひのこ意ーうこひ出こ
もこ一世中ともこりなへはきるやさどこあ
さまーうりるーこハ結へこりつるもれこひる
みろいづこくなどハあーでいとこうくーく

きづかひする気色もそひてさすがにうつ
いひろうらへるどしていぶかしがるかどのけん
どくなどとおもひ出るもねうちをかるーうを
さ海ぐるに心まうるさてまびしくおがめるまず
をいまへいとおほくまうらてもいでらぬ
何ろハこれ白家れそて給ぶ方をたのもしべよ
ちゑなべきまうそハあめれさてもあーられてこころ
やすきさ海まはえ何ろじとものびつてまうさひ
まそへるき心のとまうまてこうハあーめちどだ(せ)ぐ
このるれそつとおぼゆるぞうーうぬこころちる
やうばう心ちげまうーぐうまへどかうこと

いまはのこころうろうろうろっとよるるさ人(六)のけれ
ーさいいみうひちるきうるるまてもいとうろうろ
きまでハなるうろうこれハよろげまそもひめぐ
らされ給ろうふ(素ん)ハ家白わるうせ給ぬちど人のい
みをそうくまもうーろこのうろハうせてむのう
ちつぶまていどうるやまうーうおぼゆ家白ハどろ
まなうまうろハまぶはんさへうらめーうおぼうれく
ありうまのけうう給へ海ろうろ何(ゆん)ハうろへぶて
たうう海まもみーうてまつぐ必望まとそひた
川まをこのまーべまおもふ人へ(素)もうとまーまを心そひ
給へまうろうとうのまは世中いと悪をうおもひるう

まて、ゐ後いとうき分なりとたづねてせめ
給いあるまゝせておいらるゝんとおもてくゝとら
うこげよころうつゝ[illegible]たゝ海よまてゐるて
まへまぶいとぐ衣ようれ（白ん）くおばされてぼごろの
ところなどうぐちるくの給ふばいうをまこて
あゝうゝるゝまゝるにられくぢ給ゝれびのび
きゆれゐ給ゐどうゝあられまぐうゝ海人を
ちうくてもゐぬぶぐちらればめづくさへおば
ゝちうちとけめ（六ゑ）るよゐるひあてよろげのゐ
ふやをくゐるうゝうおばさゝまゝになろるゐら
めゝとくもとうきを（中ん）の給ひちぐろをとゝよ川

けてをくのゝとゝあきわぐゝやあゝむとあれ
ぐちゐうゝ人の（著ゐる）れもむられてとゝろ
あられゐられんぐへとはゐゐゝれどうゝ海ゐ
ざ海よていい衣をもあゝまぐゝゐるとゐまぐ
これはゆくゝれのゝれめゝいでやとゐひるぐゝも
をゝうみゝとまゐゐゝさてもあさまゝうゝ西め
ゝ海あていゝちをゝちし給よむゝれ人（夫）ようとく
てをゐゐるゐなぐうゝ給ゝ心ぐへ人ばよあゐぐ
ゝゐけ里ど給うちゝくべくあゝぐゐゐうゝな
どうよく心づひをゝ海ゐまもひさゝくゝとぐて給
ゐんゝとゝいゝと給おゐゐゝうゝべくおばゝまへぐ

とよいぞ〜はいそれど。ゐぬうちうはきこて
まつりざ海まもてる。給へ海を。ゐくいとぐか
ぐちちうはりれとおばし。ちうよれひとのはうつ
ゐぐれいとみううちこ。へうぐよれつ。乃うう
のうまいれぐうきちめ海ゐうみもまぐちうれ白ひ
なうをそのうちれ人ま。おそればあやしとぐ
めいぐ給て。いうちうしこうとぐうとうきうちう給。
ことれかうまもてうれぬとまう。あればいうん
ううきうくわうちくて。いとくうとおばいうを。
白心
きればようるうぐきうるま。はうあうるんうを海ぐよ
はうぐとおもひまううとぐうとはこうろ

きうぐきうりきういひとへのはぐうるどを。めぐさへ
給てげ道どおやしうう。うこうろうかうぐ。ゐう
白河
こうけうこうきうまて。いのううあうてもはうぐと
ようげまきてまて。の給ひつぐくうよんうこうて。ゐ
中ん
ぐをきどうう給ゐきおひ。ひきをゆうを海しこうう給
白河
と。ゐ道こうきうきまをどうやうまうこうをひくきて。
ことまこうそあれ。又はてうろを給ばうれかぐやい
色めうおもひのおまうこうううはんうれと。すぐ色て
まわふべくもあぐ。いとくおう。げこ。ゐく給へどと
中
をうくまいこへ給をあきへ。いくねうくて
白
又人まれうこうぐでのこううぐと我ゐうきうて

うゑたるれ女はあるまーうのゆひでらるー
ちこーんうちをまをいろぶはとて
中
たるれめる中の衣とうれうー紙ぐらは
てやうけるまをんらてうちるき給へるる紀の
うぶるまをう衣るる紙らるまもおーれはぞうーとい
とぐこーろやまーくてまれをかろくとうぶ給
で色地めーれはこーろをなるやまくとおいみーどきあ
やまちありともひくさあるよはえぞうとえちまぐ
くらうふげまこーろぐるーきちまのち給へれば白え
をうーみてゆりぶのる給ひうーつ行いうーへ
きこて給まこのはをこ給のどるおはとのごを

をうおゆてれてうづれゆるどもこるまはのーす
白
れたつらひるどをさばりくやくだりこ海ろ
これるきあやとこちうまるめうつーよ
はよのつねようちるれこーちーて人中べれもぐ
さもおへでみこーうちまぐをなどーていとぐ
うまえまはさう忘中るるーくなるうれいろどもて
るでーこれかうなすぐかされてうちぐれ給へる
れさ海のなまごともいとうはつくーとくきさ
までさうるる人のれよそひなまれまもひーろ
ぶれどけをうーてもおばーずるつーうれーて
きもこーろぐーのをろうるるぬまぐちる紀なあ

あうまろまうつてくることえ法へあてしへ人乃ぞこて
かうやぞこ法よいろハいよくもろうもりてあく
まおしげりうこ法はうはあがなどれいちおろ
うぬおりぶよおいぞやうつならうたきとろ
るどのお法人ゑはおぬくまうりておぼうるまく
まはゐれとうろうるどうまはあしぬ人のげらく
いひうもひてことまれてをのづうこゑけうひ
ともうこれまんハうでうたぶまをおもうんうる
ぞうろおるひうりぬべきことなうをとけづいとゑま
なきは心るこひまおぼしうしこ法ぬべうれうん
とうけてゑうきはうまたうまなどやあうとう

うきうづしこぐうひつるどやうれものとをうりげ
るくてえうまへどはうものをあしうづいとすくよ
うこことずくるまてだ法しくうきうなどぞけぐと
ゐるけまど拙まとうまぞゐうどしてもあうと拙
やしゐ法いとうくのこハあしどうとうぶハゆ
まいとぐうふハやをうこびおぼうるまこと
うこれひとの白山芳うるくきをこうろあうん女のおいれ
とはるひめべきとるどてうハこうとはさう
をるたんいとうきありひなれバうこまおうどんひ
うハすんうこと法ひや法ぐうまびしくいうあく
をくはうこうろ法いとやをうこぐまをうれぞ

それはもえいで給そびし六条院つぼねは文をぞ二さ
び三たびまれ給をいつのかどはたもりけとも
葉ちんとうぶやくおいびんどもしあり中納言の君
は白のうくこもりおいすきときくまをんやま
くおぼゆれどわりなしや・わがこころもおこがま
ましうあきぐうしうろやとくとゐそめて
あちのことをうくとゐふべーやとゐあてう思
へしてさはいへどえおぼしてざりうしと
うれしくもあり人へぐれけひるどのちつうき
かどまなへでたなりしばらやり給て母君の北
ろまいり給てらちきまうけの御どもやうふ
らふつふべきことをんとト給へど例乃ちうむ母
の御うじれまうまいちろき御どもるどやあらん
そめうちるどは今はわざとをちちめといそぐて
こそをちせめとの給へば北方ようとくしきよう
まを給へぞさみしんまちぐひてとくみて
ぞ義ちどまといせ給て女のうぞくとをあまる
ぐうまきあげちりかそかがどをちろきうひれ
アたまどうであるまちぐひてたぐちるうあや
るどうりぐ給うづうれは望うとおぼしき
まはまぐれ望うまちろくれるおれうちめなべて
るうぬまちろきあやどを方どのまううれ給へる

こそうは海のぐるりくるまいてもうあるうん
うれひとりありくとひさしひそびくらへて
ひそびくらちぐりうとうるもうひをとあぐ
ひとすぐうつうみやハすたいよの君とておとな
れとあるもさ人のむつまじぎるくへつうをぜうを
あへぬうは海のみぐるーきぬつきぐーしうもてう
くてもんとの給てれ当うのハもれびやうるれど
もこうてつうをとたらんぎちせねどされ
ぐもうやうなるれうもうひとつよのうとて
めるれうれバくーれどみへーるどひうーるふ
べよよきあうねバいぐなまどをおもひづうそで

人ぐまうちうーなどもくれバものくうーぬひか
どもづうさ人ぐのおまへちうつうまうるどをう
ちうまうてハつくうひうべなもはうへどをのぶ
うちうへどみちつうすぐうどもるどもうきあくせ
るどまてげちえんなうぬぞ中こめやすうるだ
まうはうるまるまをうーづさ男ゆう人乃
あうん文ハをううるぬれんぎーのかどすてようづ
をいうでとおぶーどさてくれどこまうなるうらく
のるまでハいぐでハおぶーふーむかぶりもかく
人よのうーづまてるうせ行へまバ世中を
うちあハびさびーきうというるゆとをうり給

いぬことゝりるり。えんさそぐろさしく。花のつゆを
もそあぐびて世ハもぐすべさ物とおぼしるかど
ゝりハ。おもかもひとゝのためなる道ハものづゝかり姫
しまつけつ。まめやゝなることまでもあれうひ
ゝ。せ給こそおりぐゝくめづらなるゆるあれば。
いでやなどそゝらつゝげさこゆられめれなど
をありゝりづゝべるどのちちあぐやゝちるゝぬたり
おりうちまぐ。ゆるどゝうるを。女君ハいとゝづゝう。
中ゝちるゆまおゝもゆゝうれるど。人ゝ道ずハおぼし
事ゆるさゝもあゝぬまゝてゝうれぐろゝ世ゝひ
びきたるれ有給の花やゝさゝ。ハ家のうちれ人乃

人ゝかゝんゝとも。人へげるゝきゝとおぼしみぐゝこ
とをそひてゝるげゝきゝと。中納言の君ハいとゝよくを
しゝちりきゝてゝなへばうとゝうゝむあゝちまふぐゝる
うゝぐゝくゝしゝりめべきゝろゝろゝひのさ海もいの分
づゝとゝゆゝるけ道どゝるゝゝハゝとゝくゝしゝゝゝてゝ海
るゝんも。中ゝおぼしなくゝ見とゝむゝ人やゝんゝん
とゝおぼゝゝるゝりゝ。ゆ海ぐ又例のめやすゝさ海の
ものぐをゝるどゝせゝをのゝて。けゝうちきゝをゝせ。あやの
道ゝ給ゝゝせゝるどゝしゝ給ゝゝる。ば君ゝをぞ。ゝゝるゝもを
ゝゝ写ゝて給ゝば。さ海ゝとゝまゝうゝづゝゝてゝられてゝさ
ゝるゝまでゝゝゝゝゝを。世ゝをゝりゝびゝをゝゝて。

あてなるんぞ海そこよるけるど故家のれ山ぞそ
とみそめ沼しりぞさびしき所はあされさふ海
ことあるりくりとそころぐしうおぼされてなべての
せそもおもひめぐしふっきるうけをるるひ
沼よろぐいとおしの人あるりやとう・うくてる沼
いでうろやちくおとるしき人ってやこるんと
れのふるもこぐりぞ心よかるとてくるれば
文るどをまるりぞ海やうるすれぞ悪
びあまるるれみをつるこそ沼ふを・ぞいい
とびちるそひよるる方とおぼしるげうる
ひとへまるぬ人なるぞ沼るる船ぐるおるとちた

ちあさるれるんをやとうべき沼むるりる海
ことなるたのるべよるるひさて・ゆのさるよるる
あうるるる心を中るる人めけるべしすぐみ
ゆさちうるもあるぬれるるぐ人けりる海のあん
れをるるぬるはあるぞるるとてるうけるぐ
かるあへるりんもひとつまるくいぐいるべう
むとるるげるるひるれ沼るるるれる海人ぐるすと
しものいるひありぬべくけやうるうみるあ
るるるる心ちしてこあるひるれるる人とてられ
山里のるる女ぐうなりるふとをるるぐんるる
うう・いひあいすべき人へのるるさまるる・故姫ぞんを

おもひいでをきて侍るもあるせまうぶ
こよし人もう〳〵は心もそへ侍るまゝやといとうた
う・文のつゝくるりぬのりんるげさうもはてといと
ゝうしうえ西おとこぶをきゐてをひまびて例の
ものやゝるるタつゝおりうりやゞてちゝはれも
とれさいいざさせめて中将いとるやまゝきかどそて
なんえをてしさせぬと人して学いだし侍る
ときくよいうどうつゝくて酒のおちぬべきを人
めよつゝめばちめてまるぶゝりして侍るやませゝま
ふれりはちゝぬ侍るどをちくまいりうをとすす
などれつゝるてもんをのうちまふさゝぬまゞう

やゝうく人づてるうれをうそをるんうひるさ心ち
をるときをゝぬて・いうものちげるれゝるれか
侍と一夜柏の気色をうゝ人ぶげるやいとみゞるう
侍りとて・もやのうちあろしてよゐれ侍の
ざまいをなると女若まゝとは心ちもいとゝるゝけ
をど・人のかういふようゝうてゝちえんるゝむをゝい
うゞとつまゝけをば柏うるゞうすゝねゞりいそ
くゞいめゝへりいとかのうは時ゞものれ侍ふれ
をりひの放れるやゝそあ侍へをゝゝろまゞお
もひ出らるゝをゆゝしうるうてゝきてゝす
ゝちちのへゞとえんは柏もいとれゞ・あゝひつゞそ

宮し給ふよるおくまり給へるもいとつゝましう
たゝさより本丁をすこし〻をしいれて例のるれくち
げよりづゝさより給ふ（中ん）いとゝうるゝれば
おぼしてかねの君といふ人をちうめうせて
ねをんいろ紙たゞ一をそへてとの給ふて（芝汁）む
ねををさへいろいとゝうゝ給ふものをとうちな
げきそめるをり給ふどをばゝそ紙さやをとうぬ
いろるれがゝくゝもつゝよるやまいうはおぼさるゝう
む人よりひ給ふ（ふ）たゞ一こそんちをあゝちるれさ
てみよろをきありありちるどこそとゝへ給ふ（ぬ）
をけうくきくもてるをせ給なめりうとの給ふ

（中ん）
いとゝうゝうてむいいろもるくゝくゝろい給ふ
むゝの人（ま）をさそいものゝ給ふゝがまゝ紀
人のをろけざとゝ人をいひ給めゝとぞの給ふ（ま）
れもちとせのれるゝめゝをゝいとゝ給
ゝゝう衣るれゝゝこれめゝゝをゝろ人（かね）のをゝんを
つゝまれゝゝをゝいゝをゝをゝれとゝ紙ゝろえゝと
どむれゝむゝゝうゝをゝをゝゆゝちまなどゝれえ
ゝゝひとゝ門よいんえゝをせゝるゝゝ人ハみゝゝをもゝく
まゝ紀ゝ海よゝくめやすくゝゝいひなゝ給ふをゝ
ありゝゝ紀れゝゝゝゝゝ人よもとき（かね）ねゝゝゝる（ち）ま
ゝゝつけてを故（大）若れれるゝをゝ紙ゝをゝ紙ゝをゝ

へは、いとけなくしかどもこの世中をたゝひもるれて、
やうやうぬべきさんづのひとのこゝろをさうべきなり
屋敷をんうとなる物ゝをとりなすべきこゝろなるべし
しひとゝまうれかいのひどをんをさすがよあが
ひやうをんちぐさめだりまこゝまもうこゝをを
りゝづゝひてひとのありさまををんまつをてま
ぎるくるもやあしむなどおもひうおりく侍
まどさゝまかうざまはるびくべうも侍らざら
ゝりよろびよをまへわびてい心のひくゝるのつよ
うゝめわざちりれいすきゞ侍しまやうよおば
さるうんとゝづけまどあるまゞ記ゝろ乃

うけてもゆくべうめざまゝうめゝうぐうぐりう
のりとまて時ゞおまゝとをを罪てさせう行あ
るどゝてべゞてるくの侍うよりんをゝれいハとゞあ
りづべまを世の人まくぬゝろの程ゝ乃人まもど
うるまゞく侍ゝを行うしゝろやをくをおも侍た
まるどうゝみくるゝきゝきて侍う（中行）侍めるる
くゝひ罪ゝだうくあやゝと人もゝ乃おひめべ
ゝゝまゞハきゝて侍ゝべくや年びこるゝうなるま
つけつゝみゝ侍まゞをれ侍ゝべこそゝまこと
ゝゝゝのゝびとまて今ハこれゝゝ乃どゝへた
どゝうきこゆまとの侍へバゝや（末行）人なうおりも

そこに住らめ地をいとうしこころを事よおぼしをき
ての給へすらやこれは山里いでらいうぎり
らうしてめしつるを給べきそれもげよ給らん
ドもろうさありてこうりとをろうやハおもひ給
るどの給てお給いてくもれうしめしげなれどき
くひとあれバおもふまくるまいでらつづけ給りん
ものうををすめいづしたれバやうくくらうるり
まろうよむれこゑだらうまぎれるて山のろ
をづくてなるのあやめもそめよいとをめや
うすらけまして給へるもウづりしとのを
うちまはおぼさうぎぎらぶるあるどいとをび

やうようちずでゑ給へるびて給らをとるまし乃
星をもとめまはしきをうれ山里のわるりまま
ざく寺ちどいなくとをむしおぼゆうへぐをを
つるりゑるのるうをとめてをこるひ給んとか
むどうまへなりまうとの給へばあれるる給れ
ぐひまゑうてみてしし河ちうきこうちする
へぐうをそおるひやまいとおしう給れこがね
もとむうゑしをこうるどうしろめうぞ給
ゑやとの給へバそよそのうををゑしもいで
うこうろまうるるまべきわざなりんちうさせり花
ゆしせうたうを給ろうをあやうんゑんぐ

忘の人をゞかおどゞろ海うゞ波よるまんゝ
ふなのきよう紙ちるげき絵ゝ紙のいと四ゝうげな
海もいとおゝうわづゝりうて海をこゝすべ
つまりて人ゞ(訪)されつゝでよいとあやふくゞひろ
まゞきるまゝそゝいで結れとの結けをひの寺
こゝるゝゝ紙をいとうれしくあられまて何(芳月)
ゞゞまゝいまゝにあて世ゝまゝをゝふ
迷ゞいとう海さくゞひるゝ海迷ゞいゝさ海まゝ
てゝゝ心をやゝてゞゞゞらゝにあゝむとゝへゞこれ
ちゝゝ人のおもりんゝとのあいまゝてゝまりゞゝく
もてゝ結ゝらゞゝ(訪)ゞゝろゝ世よあゝむゝもゝら

ゞゝゝ人のゝこれゝゞゝ紙ゝゝゝゝゝゝゝ海ゝゝて
ゞゝいゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うゝつゞゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ紙ゞいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ざんとの給へば、中汁いうやそのゆへをいかなりん
こうもこわいかな給へば、ものいちるをあり さ海
ぞもまて、せよ、おちとそちさぶらつんとすむこと
とのこうろめるぐるおぼしうちうしくぐをを
たぐひとりうきあいめてどひそれ給うまるる
あいなきことをさへうちそへて、人をそこてこ屋
んこそいてくかうべられとの給ふ気色をを
ふるよ、ふるの思びて拙るどの給ひりん人の思乃ぶ
ぐさつををもちりうるべしとらうめまるち
との給ふゆりまえとまりてぐちうてそれ
るどうへいひそてさせのてよといぶうがら給へ

ど、中ん さすがまうこうこいうさくそえこ海うまもさてぬ
ぶ、中汁 ぶづのむとおぼせんあうぐそのわうちとは写
えはべりれど、ちうはしをえをうぶやまるあ
まりいくぐは心をとらをめべきことまるんとの
めへば世、芦汁 とうをなるるを思のありうぐのよ八て
ろのうぐらすうめべをいとさまでハどうをへ
らうべさまはあうざるれどいとうくなぐさめんう
うるるさうちくちうは給ひとぐるのねぐひぐ
うまはるどてうは山ぼ宮のりんぞんまもおるひ給
らぐうんる紙たうるの給をせよとうちつけま
をめきて給ふ中汁やいうへのはゆゆーもなうし

こと絶えうるまでをもとしきこゆるきはいとく
ちがひけるでなんぐるのことをもとめ給ふいとお
しさよこそとくもとて いとどさ所なる年ごろへ
ようろを母なる人のいとうれしきまでおもひて
あるべらまことごとしたらしなどたるくもえいら
へで侍しまものしたらかのうるらしふべ
まやなるまでとをもて程らいとづらしうるぎな
んえてしこれをいろさ海まもてるさんとるげく
めりしに佛まるしんいとこよなるさるまでそ
いあしめさまでいいろでふるどきて給さりげ
なくてかうういちをさ海をいでいひそれり

わざをげれとおもひ給へ分とえるふつけ迄どさ
まざまあいれるあるまでれとはあくさらま
へはものうら世うまりしるさ海まえて
る給らめをえをもらめるまこそとおもん
ときめれよ歌もいうう文りをうちまは人めい
とうるいうてえてめてうちたゆめていら給
ぬ迄べおとを君というとはあてをへど牡いてう
らめうちおしきまこそづめんるまるき心
地して涙のこぼるも人もろればよろげまも
ひみぐ所迄どひるまるあをるるんもて
うしをるまをいとうそわづためまあひるる

べくれば、ねんごをしてつゝもちもるげきぐち
まて出のあくのこおをひてハいそぐすべくらんく
ぶしうをあべいるぶいくまてゝハおほるとの世
のまぐれあるまぐきちまてさすがよふんれ
るあわざとバをべうんちぐおりちまんー
ちゝろるまねばまや、ゆげあめ人のあもて
わやをるまぐきとぶ紙ちるくおげしあす
まちとのくまへる人をもうでゝハ海しとを
ハえるべる。さぐられきとられぐやよしむよ
くうハあくびちをひとれかいまもあくばいう
ぶくくそゆるべくれるぐなをうるこげまへ

ちゝちたるず。宇治のこゝやと久しうあの時ハ
いとぐひとをくちるゝちしてずるゝよんがう
けまぐなすぐ世よりのかぐよおくしちいくぐ
きく風のこゝちひてんすぐうあるまをなる
あれをものこゝやどもりて人げをみしぐるる
まづまくしるきるぐうぐちなよ弁れ
あまりいぐぐれバちうしぐぐちにあとをびの本
丁さうひてまいまち。弁内いとうくれぐまてれ
そうげを結まぐてまくくなんとまはるハ出
こぐ。謡内いまなぐあ行うんとゝやちまおなぐんちる
人もなゝさ物語もゝゝんとてゐんぐちるくも

つるを月うれそて涙をひとめうけておハする
ま老(弁ム)ハいとぐさ(ぐ)ちにをきもあへぬ(ぬ)ぞ人のうらて
あいなく地をおもかけめり(り)ぬのそ(そ)ぐうち(ち)ぬれ
もひまへいづ(づ)こ(こ)いつ(つ)ゆ(ゆ)ゑ(ゑ)中ま(ま)を秋の風ハみ
ま(ま)こそつ(つ)うおぼし給て(て)げ(げ)ようれ(れ)ぬ(ぬ)るげ(げ)を給め
ア(ア)を(を)ちら(ら)ち世中ハ(ハ)ひ(ひ)ろ(ろ)ぎ海とうのうよう
け給もさ海ぐ(ぐ)まなすどさこ(こ)ゆれバ(ば)ど(ど)あ(あ)ら(ら)しもか
ゆ(ゆ)ゑ(ゑ)ま(ま)ぬ(ぬ)ぐ(ぐ)ふ(ふ)ま(ま)ば(ば)る(る)ぬ(ぬ)ま(ま)ゆ(ゆ)ゑ(ゑ)を(を)あ(あ)ら(ら)を(を)あ(あ)ぐ
きなくおぼ(ぼ)ま(ま)ぬ(ぬ)ん(ん)ぐ(ぐ)ぶ(ぶ)あ(あ)やまちのやう
ま(ま)ぬ(ぬ)ま(ま)ぬ(ぬ)ん(ん)ぐ(ぐ)ぶ(ぶ)あ(あ)ぬ(ぬ)ぶ(ぶ)の(の)ぬ(ぬ)ま(ま)ハ(ハ)な(な)ま(ま)ま(ま)ぬ(ぬ)ら(ら)ぬ(ぬ)ら(ら)
よ(よ)ぬ(ぬ)ま(ま)ぬ(ぬ)ま(ま)ぬ(ぬ)ど(ど)う(う)ま(ま)ま(ま)ぬ(ぬ)ら(ら)ぬ(ぬ)ま(ま)ぬ(ぬ)ま(ま)ぬ(ぬ)ま(ま

ちゝも、むすこの八乃ゆへあるにまゐよりあつらへ
名ん所をひきこがせんもるとけるさやうなれど、
それにてろざしもくるのくるはすみぬべく
おぼしけんをとまり給りん人ごとおぼしやりてえ
さはをきて給はざりしまや、い海ハ兵部ゝ家の小乃
るきそいまり給べくれば、ゆれ家の此つやうとをい
ひつべくもりよりちさきばこてなぐら寺まるるさん
ちゝはびんるるべ、ふるまりてさもえせで而
のさ海もあまりよ川づちく、げちうまもあれば、
ち紙ちん殿をうしるひて、ちざ海まつり
ゝんのふゝてるんとの給へば、あぢり白そゝ海うざまよ

いちもうこうゝうちゝさはるるるち、昔ワれを
うるゝこそ、ゝばねをつゝこうこそ、あまるれゝくびよ
かけて給ゝ人を、佛の此ゝうゝ殿んまゝゝうれゝぐれ
のゝるゝとすゝく、つゝまよひじ罪れ道をいり給
まよゝるゝ、これちん殿をはらんぞるまつけて、此て
るうぐ、紅おりゝまゝすゝん、ひとゝへよゝいぐ、ちさ
此ゝまるゝまゝ、浅世のの此ゝ、ゝめゝもなるべゝさて
とよ給ゝるゝ、いゝそゝさはゝうまつゝすべゝ、こゝまゝ
のゝるゝせれゝゝひゝて給ゝんはをうけ給て
地のゆへゝりゝんたゝゝ二三人をぬりて、海
うるゝこゝぐもハ、仏の此ゝをゝへのまゝよつゝまち

らを伯しんとやもせ（結カ）くれうまひさぐめてみ
さうれ人ぞをめして・これかどのことぞをあざり
のいえんまくまよべをさうちるどたかせ結よたち
なくられぬれべそのの抜いとぐまりのめ（ばん）しあび
だらうそハみめとおぼしてこちめどりつてえ結
へぞかとけもえ寄をうしてゐれバおま
武のをそちるひのぐ結とおりいとちるげよすまぬ
ちと家よいをしてもぐすんとえぬふ（汗）これ
ちんでんハえてちつ屋さやうあ・つくりいでんか
どハかれらうま抱し結へ・京の君よとりわさうべ
き抱ちどあらバ・抜さちの人めしてさうべらんやう

まものしのへなど・まめやちるるずをとるらひ
結かうまてハうだうりちぐすぎたらん人をちるよ
うとえのれ結べをさまもおうねどよるもちくふせ
て・むう（年二）抱ぐちるどをそ結・ね（ねんぐ）抱大納（ちゅうなご）云の君（ちゅうなご）れ
れありを海ををく人ちるをふんやをくていとて
やうよ写四・今（年四）つとなり結し海どよめづらうお
りますんれありさ海をいぶらし抱ちおもひ
写さを結めりし抜ちれるどれ・抱ちひめへいで
らるまようくををけ伯しめ世のををようてをを
四伯ちなん・れ抜せよむつまうつうまりを
をうをるのをのづら伯ちとうれしくもお

たくもんひこまへきこれ侍るこころを今のかど
まてうくさ海ぐれするをとこのへずゝ品給へこと
侍るもんいとそづゝうこころろうくなん侍る文白うう
を時ゞいまいりてえ見れおばつなくこえもこと
てめるひこよなうおもひへづてくろる光りなど
の給はするおりく侍れどゆゝしき分まてなん侍
そぶ佛ちかりよなみてまつるまゝきを人を
るくなりて侍るどそこゆ故姫大君のはてゞも
そこつよもせばそゝびの侍あるさ海ちるどころて
るよれおりなるとの給しそれもみぢれいろをみ
てをだろるくこと給ろうるゞころるどとはき

たくろぞうちわるきたれどうこ家もこあうし
うことずくなる侍ゆうおうろ人のはてて
ろぐへうれとのこいとゞそこ文白給文中のはてこも
今すこいまめし紅梅うふゆうはぐらん人乃
こあるはゞこうるくもてあ給つ屋くこそもれ
し給ゆうと我まそいとんうくるこけくしと
いんこていでるこてんとこそんひのへ迷るど
心のうちよおもひこべ給さて梅のつるでまうれう
うさ毋うろれるすといひいでゆゝしの人ろ家はこ侍らん
えこそり侍ゝび人づてまうけ給ろしるのす
ちなること放文のこぐうこ侍山ずこもこの子故

心のうせぬるうかどちらるこころ中将の
君とてさまひろる上らうのんぞせるどをく
うい侍らざりるをいとものびて・そらたなを猫よ
地の給をせるほとをうへも侍らざりるよ・女房子
をたんうして侍るをさまやあしひとおばをを
とれありるうを・物のいるくわづらうもれ
きやうよおがなりて・まさをはらんでいる
ことを侍らざりる・あいるくそれとよおば
をまて・やがておはるをひどまにるを給ひよ
けるとそ中将きんるくおるひて・えさあいつどちらに
るほがえられるのうをれめよるりてくぶちるほが

ひとくせのがりて・それ・えたひうよ地し給ふ！
はわうるもかのめしーりちるをふをてめ
つけて・さうようほをううこあるべるこをまを
らずとの給をせるるちられがひるくてなんか
げを侍りるる・さてまるひるちをなりてくぶち
侍りるるがはとーはををこて給ばざるう
るがはをのがりて・うれ変りるいるづひるうちる
るとなんかのまて侍ーうれ・浮舟の君のとーいどるち
どるるるる給めるんう・いとおーげよおひいで
給ふが・かるーれ八と大との花浮舟手紙をとるどこそ中ごろの文よまへう
きつげてなんをべるーとーるゆ・ふーう

さくあるさらあるてたちらば海とうてもあんう
し・みぐやとかるかんいでできあむ（河）ーの法けうひよ
うけてもれてもむ人かもうぬうまでもうづる
おしまほしきうちれあうとうぐまへかうざる
れどもかるぐうきさんまうそいあるれづざと
いるくともはわちまをとるまおりはらむつみで
まかくなんいひしとつて人給へるどだちの給ひ
そく毋君ハ故ふるこの法めいちり弁をるれは
ちうちひよ給べるをうれうをハかくよ給りて
ムわうもえ給へるれざれ給さいつろ京ちう
たいおぐちとちゃしてちーハうれ法なんいうで

れれそうるぐまいしむとの給なるちんを
ふるど給ーうどまぐうこれさーうへてはとと
ちるづ給めり今さうばさやうれつみでようは
おほをぐるどつうへ給んとうきゆあけれ
ぬばうへをおりんとてようべをうれてもてまの
法きあわるるどやうれ地おぐりようをうら世給ふ
あま君ふものふ法師ぐうあさぐれげをどもの
ぬうまとて布るどいふものをうへめーてうぶん弁
ぐそきをまおるれどうふれうあうひうゆさ
ざりうれば分れかどまハいとやすくあやうまてか
むをうるひうるおぐうしれうぐれまで吹とを

したりよ。弱る木ぞうをたなくちりもさたるまみ
ちをあとをかりあとをとめをとわてどうよ
をえいで活つぼいと気をあり深山ぶよやとりこ
つるされをぞまぶのこうこうこそこたるどすこーひき
こうを活て。文へとあばしてもこせる
業 屋どうあとおもひいでばかこれもとの接ひも
いこさびしこうまーとひとりごち活をこそて。弁あ
まぎこを
弁 あれこうこうあれもとをやどうをとかもひを
をこうかどれこるーさ。ぐまでみるあをこれど。ゆへ
るくいあこあとぞいこうこれるぐちあよいおばれる

中
こやまもみぢしてまつ里のへんばおとこ山おろし
ますらをぶりなりけるみれば京らしてちるよごろ
をなくまてまいりたると女君例のしつらしさこと
もこそとくらしくあがせどそりうくさむしやいらや
かしてつくれとこぶるよびの給てゆしをそ
こ給はれとまことは夕日ぶるまごとうかしまするんやまぶ
まはていとぐ筆は新書ままどひ給つれは相ぐち
をこうげうるんうこれきん殿ぶうまるすべきさま
あぶるまもれしつを給うまれはゆるし給てこう
いかようつをこともはしら給へ弁乃尼君まうこ
べきおはをどといつくせるどうあるようもは道
うきあへはかこうれまろありとぞうきつうんとの
給もずうしはげまさやなりつうん女君ハとうれを
うれしと思給まあるぶちまくの給をうりなし
とおぼしてうちうんじてあ給へはれさ海よろ
げのつうもゆうしけべぐかし通るうい給へえ
じやとそかうざ海うそむき給へう坊まへてか
ざうむをあやしけ道ば必里のはありきのうう
やまうも給れうこへげまさやうそこうう
らくとも給へしをことはうまるよ以はかれ中を
とかんうらハあうしうまぐうも給うをいう
まそこ給べきこ海まるこせ給うぐどうるうび

そんとさこて絵うるくさくそしてもるき御
ひつびるるらと見絵ひるぐら白つげれうろな
らひよこでるらぐとおばすぐやそうらぬうべ
しうれぐるる前栽（せんざい）の中よおだれのもれうら
とよるをそしてまるくがおしうるゆうよ
まるわよ出そしうるを嘉とつるあるさとしう
むれをそうるげようちちるびるさるど例のと
なれど夕風ち銭あられうう
白
わよのでめもれおるらしものずくるま
わくたるの春をげくしてるつうしてわどれは
ぞどまよるとそぐうき絵て琵琶をひるあ絵

へううちるるでうけうるあくをとうとのられよ
ひるちしぬへば女（中）ぬまるろよいりぬへうと
うてをのそんじもえしてて絵ぐばちの馬されは
本丁れつまるうけうそくよるうるてかのな
さいでぬへ海のとうる海わしくらうげるう
中
秋そうのべれそしきもものぐるかのく
風よつけてうるれ引ぐ月ひるのとて漁ぐ海
海ぐるすぐよそづしるればあよぐとまぐうえ
しておうするうるれうちのらうくをそしる
ら海を白ど白そ海まそそ人もえるもひるなるざ
らあとうるぐしうるぐたぐるるでうるれ

ちあり菊はまぎらくもうつろひそぐわざとく
ろひうせをのへうを中くをそをさはいうるひ
ともとまうあんいとアム所あてうつろひうを
とりつきておうをあのて花の中はひとへまとずど
結てゐるまぐれみこのそれ花めぐうタぞうい
まへ天人のうけアそびそのまとへうハおうり
ぐとをあくくちうまたう世ハ地うやとそはと
さーとを結をちちおーとおぐてんそあく
をあうあびうとつうへうんとさへハるどてう
さもとそおぐつうるさてうどとゆーげイ
おぐいうれぐさうぐひとりごとハさうぐーきま

きいつへちまへうとそそへめーてゆうのは琴
とうはをはをそひうをくそうをそまうたまへど
そまわぶへ地ー結ーどうぐちうさくをと
めぐちうまー地をそてつまーげうそあもまを
結いねぐかぐうれるまもあぐそ結へ原ーうこうろ
ううれるのびアうあうりハまぐひとんとくべきかど
まもあうねぐうるうちをうねとをもくさぐ
ーそはれをべてかいやりううろううてれ
あんうるさうーうろそれ中納云もまぐひめり
ーぐうれまるうるうもてを結りぐそうるき
はは中なうあれバちぐまあやをううみられてぐ

うちなげきてすこしもとへのふゆびちれ
ぐんもさでうはあるを結うるあくもなど結
まもとおくうるさ面白のうこうひ結ふ結
ふのあてはおくさとかぐれものくうろ
まちづきまいりてふそひろごりてぬちふる
（ゆりなぐ汁）ぐろれくまるくはなどそれもとろ
ちれば枕つがおまへとびさいくとうりさ
かくふれあうさ海はまぐらひ結べくもなのぐろ
そぐろれはもまおとまくさうちる海わりげ
おげてのおいすくそいくろうけれちどれ
ぐいひはへばつるきへぐはなちる海やとせのすれ

ことぐもそくへくそまちりたぐもつく三四日こうそ
まおくてはれ枯みちるどことつけ結とうれ海
まへうちめくおげてかぐうちちり出結け
海まくはくさ海いちくまへれが変（白ん）ことくもげ
ちちる海くてちくはいまくつるぐとちとむち
ちりぬへどあるくはちくちり結てはいめく結（沒白）く
ちちるるひりどへこの流とうたまへで久くう
なち結ちを寝はようちるどが著のれ枯ちるどすを
くくくくし結てやぐてひくつれくくくぬて出
結めれたどもれ海ぐちくあはくぐ海はどもも
いくおげくひくさぐでき結へ除れいくちりひくちれ

をとろ（ぼノ女ごん）ゐるふべくもあらねぞ。いるさだりろべ
ざのぞろて入をりてさもろさろまおりけれ
ぞくなさばらいづれともるく。ワうさりて。
きよげよかりすれどもれよのべるさもるり
ろりおるめでさやといふもはりみさがりやん
どるげすれさ海まて。つぎとれひくはまいり
ままへ海そまくけ是やそげるれ世やるどう
ちるげくをあるべ。（けん）れ分づろよろ。ろ。ろとと心
出るろりそめられ花やっるれるろひまろ海
じゆべくもあるぞ。するなる身のおぼしとく。いよ
いよんどうろれど。ちを心やしくこるりみるんのを

こそめやをそうめるどいとで笑て語とろるくて
とも（業次三ヰ）言ぬ。ひ月のつごりざろれ（中）いるら
ぬさ海まなやこのを。（白）文まざはらんじなろいぬ
るまて。いろるしむとおぼ。るげさて。ぞほう
るど。あくまてあまさをさ世語。みこそじめそへ
さ世語いといろワづくひのへば。語の（ささい 吟名中文）こころやよりを
れとふくひありくて三ろ世まなりぬれど。一而
のれんざ。こそそろるるね。大ろさの世まいもれ
くくうもてるくこそて語いざりつるどこの
ありそいづこうもくこうこめ。おどろこうて。
れとあくひどもこうこて語ろる。中（業）納云の君を文（白）の

おぼしさぐらんもとぞいうよりとんと分
げさてこころぐるしくうしろめたくおぼさるれど
うざりつるはちふしひぐりこそあれはなまりもえ
まうで給いず思ひてぐれいのりもどもをせめ
ろさぶは女二の宮はれもぐさこそはべりて
世中ひぐさいとものこころのみどく
乃はこころひとつやうよおぼしいそげぞ中
うしろめたさしをぐ中こめでこげよんしろ
女二の母 女はれのもとさ給へはるどもはさ物あてばくを
どころさるべきずとやうどもるどどりぐうつ
くまつるるずをいとくぐりなしやぐそれ

かぐよまいりそめ給べきさやうよありくれば
ぐこもんづひしし給こころるれど例のおとるれど
そちるさばまおいんをいしでこれはつとのこいとれ
しうおぼしけげろ二月のついちぐろおを
しぢといふことよ權大納言よなりて右大将ひ
給ひ右のおぼいを左まるておりけりぐおくめへ所
ところなりろよろびよ所ぐありさ給て比文
まるまいりめへり中いとろうちものへぐこなのさま
ありしますかぐちりればやぐてまいり給へり僧
ちどさふひていとびんなるさまとおどろさ
給ておぐやうなるはちとこはちるさぐれるどを

月ひさつくろひておりて、ふうのくい（拝）ばかりさ
ゆ、どもそりぐるまめでたく、やがてこうひつくさの人よ
ろく（笑）あるべしれ所まと（白と）ささうじ、まり給となりやうに給
へ（中）よりてぞおぼしゆゝしひなめ（ク）ゆ（ク）ゆ（ク）たのあ（ク）ゆい
殿のきさまひろまりまとして、六条院まてなんを
ろ（ク）ゆ（ク）ゆ（ク）ひ（ク）れみこちら上ぎ（ア）だ（笑）ぎ（笑）よりそらぶ
あまりさはぐ（ク）ぎさまでちんつどひ給ろ（ク）ことれ（白）文
もりうり給てきづんるけ道びまぐ（ク）ことてぬよ（ク）ぞ
ぎうへり給へ（ク）ほを（ク）おぼ（ク）ゆい殿のはりさまはいとあり
ぞめざゆ（ク）ゝとの給（ク）ぞ（ク）ほ（ク）べうにあるれ（ク）ゆ（ク）ぞ
なりとうぐいゆのおぼえのらるやうさまおぼし

とぐりてぞ（ク）ゝちもてなりあへ（ク）ゆるありう
ゆ（中）りうゝしてそれ暁よりかとこそひまれ給へ（ク）ゆ
ど文（白）おもいとうひあるさゆ（ク）ゆるそうれもくかぶし
ゝり（笑）だ（笑）ぶのもりろこびまりへてうれゝくれが（笑）す
白よべおりゝまゝゝりゝかこまりりやがてこれ
ゆりろこびをうちそへてぐちるぐるまいり給てう
くこりりおりゝまをばまいり給いあ人なゝ（ク）ゆう
ぶやゝなひ三日ハ例のたぐ文（白）のれりさてぐこ
とまて文日の夜だ（笑）ぶ殿ゆりどんぎさ五十具（碁）
てれぞよりうぐどんちどゆりれつねのやうまてこ（中）ども
ちのおまへりつぐさ三十ちぐのほぞいつへぐさね

まてはしつさるどぞうとくしうらびきのびやう
にきるる給へれどこ海くよられば いとわざとめ分
まめ四どへまぞ見てしる。詞れ申へまゝどんくう
のかしさ十二しして。こうつきどもまて。あずく
まいくをゆへり。女房のかまへまはついゲきをぞ
こ海れまて。ひらりご三十。さ海ぐきつくしう
ことどもありひとゆるもとくきくハ。とくきく海
しうまりぶ

七日の夜い（宿）の文より はれはうぶやしるひるれど
まいり給人ぐいとおほう 文の大まとをぐ先て
殿上人と遣アうぐすぞまいりあへり 金 うちうを
きこうめて 文のりぐめておとるび給るうまい
いでうとの給をせて はしうしてまうれ給へり
九日もおかいあるよりつうまうを給へり よろしか
らぬおぼすあうちうれど 文のおばさん 和あれ
いはの君ぐちうぐまいりあて すべていとおほふ
ことなげよめぐこうれば（中山）はうぐうも母ぐろ和おも
いしく心ちのちやまーきうけてもんぼそうれ
ぐーうちうまうくおもぐーしういまめうーき

ことぐを先おほうれば すうーいるぐさみもやうう給へう
ん（大荒）殿おいくくのことおとちびをて給めれば いとぐ我
うぐ海いけどをくやなうん 文の はんぐーも え
をううなうぐとおふいうちおーうれど 文ぐ先
うちのふをみてをおふよいをうれうもあり かか
うてそれ月廿日あまうの刀ぐまぐ藤つぐの 文
乃はまぐざのことありて まうきの日なん（荒）大和まい
月給ぐうそれ和のことい志のびーうう海ちり あめ
のちうさひぐこうて いうてくみーうはーづさ
うう人のぐーうてまうり給ぐ和あずこうぐ海
きくうゆうさ海はゆう いあうなぐーおたぐいまうく

しをいそぐせはまでこさこどうしと、そしら
ワけげよおひのはふへどありられどおばしちち
ゆることすくくしうおワまんはんるてこうか
されたりしるさまでおなすくハもてるうんと
おばしをさつるめり、みどのはむしをめえはへる
人ハぬしも今もおはられどくさちのはせて
たく人のやうよぬこどりいうをはへはしづひそ
ちくなくやありうん、たのおくをめづしうと
ゐう人のはおばしちくせやり、はゐ院ど、朱雀院のは
ちをるしるせるて、いまいとやつはしさいるこそ
れちくみやとえてそまうはしづはまそまて

ひとゆうれぬ地と、ひろひうしやとの船び
つれど、家いはげよとおばしをまづうてはいく
もえてのりず、三日の船を大荒ちうちでそ
よはうるれんよせまちるうせはへはへくけいて
まおはをどのて、志のびやうちれどうれはどん
ずいぞん、車そひどわうちるぞまでうくぬうす。
それわどのことハつてうごとやうまぞあり
ろうてのちハちのびくまいはるんのうち
まはるとワはれどうきいはへざ海のをおばし
てひるそちとまおさみなぐめうてうる
迎ハんうりわうまいそぞまいはるはるはぬん

世はいと拙うくるしう海でさせてまち
らんことをぞおぼしてぐる母家はいとう
れしきことをおぼしてて汗まず寝殿をさ
まてけうしなりのべくの給へどいとうさじけ
ちしむとてはれんぞうれあるひまらうとつど
くてつくらを給ましおもてようつろひ給べなるあ
まひんぐしれ意ぞもちどをやくてのちうは
ちくはるらしくあしう海りきをいよくみ
ぐきそへつてこまりまもつくしはれこころ
づひとを給ちまさろめてかどちくうちと
けうつろひ給りんといふとおぼしちみど

と思ゆれど心のやこいおをどとまちんおりま
しくる母家はれまとまはつひありくるはあまま
をたびはとをのこなん写しさをあくりくは
加朱雀院のちりはをてこれあるあれはとぞ
きてしちを給しうべくく世とそむき給へ思ど
おとろへぞたるまごともおもはれまるそうせを
給とちどいかなるしずこさてめしのれはよう
いあくまりくやむごとちさはこころざをう
くみはうぞりもちくもてうづきさはれ給
おもぐしさをいかなるまむこころのうち
まはとはうれしくるえくびるをとすれどうち

なぐめつゝ、ゑぢの寺つくりをそいそぐを、給家の
のわらぎこれいはゝ（今日）なりぬ、給日ゝそへとりあつめて、それ
もちぬれいそぎをんよいれて、こ柏ひまりごゝるど
までらいれつゝ、世のつゝ（ひ）れるべてよいあゝずとれ
ゞゝこゝろぎゝてゞ、ぢんもゝんもゝろ（ひ）こゞれを
どみちくれさいくぐるいとおほくめゝさあゝら
ゝせをへゞわれをゝらゝゞさ海ぐれてとぐもを
ゝいぢめゝ、給づゝゝも、例（仏）の家れ（白）おはすゝまさぬひ
まよおゝゝゝゝ、心のゝまゝやおゝんゝ海すゝゝ
とくゝくゝやむゝゞとるゞげゝるゝゝれさへゝそひよ
ゝゝとゝ西、今（中ム）はゝゝゝゝ

うゝやこちく分をうゝむべうろうゝ・ゐるよごとを
ぞるゝゝでき世の人めゝゝきこともあるまぢうり
ろうとおぼゆるまぢ・いとぐうれうちうけてぐ
やこちんと・ちひのへりしはんをうていちをとと
まをもくゝうちいでられ給・ワ(漢)ぞ世ちよゆゝ
ぢうをてゝ多まへ(中ん)ぐとづゝゝうれど・何うい面ぐそ
ぞやまあゝん・まりちるきことひとけまつうて・うう
みうるゝゝちおるいでうの人乃はこうろよ面ぐは
ぐとおぼゆゝて・うぐゝはとちくもいゝへ写し給
とぐめれてゝきいぐでき世面まへり・はし(茎)ちう
とうれぐ・まくげるゝむやはゆゝしきまぐきうく

うゝうゝて・うやうまはぐ・うちうこ給へゆう
はをうるよ・ワぐもれまぐ・うまはゆゝう・うまくやゝ
きも世の・はをうれぐうゝくうちめうまやあゝん・
ちまぐいふうひちくなりう給ゝ・ひ(大)とのよれつ○
のあさ海まて・やうるきんひとともとぐめをさ給
へうまゝふぐものこおぐゝて・ぐ(比)ぐおぼ(冬ニ)ぐうきげうう
はあうちよ・いゝゝうるぐいちうゝめうそはまうす
べをのうさ君のはんなめれ・くめゝきうねぢけく・
まぐびうをそこそいとおゝ・ゝれ・きワうびうこは
うゝん人を・そうぐ(今上)ぐはうワうさちよちづけく
むうび給べきまあゝぐはを海とゝはうこ

ざはのはるゝをよてちゝどゝそいめやもくものゝ
ゆけめとゞゝをゝとろはべをさげまいをとくちるれ
はどをんとゆへるも春ちるれば是いとりハ物ゆちど
こまやうまをゝをゝし給かどまゝ尝めればこゝろやもく
物をゞまゝをゝすまゝゞをさゝをゝこゝをゝうおばゆれハ物
げくくもゆめ中内人女河おゝゝめひとゝの花白ひやゝゝりゝれ
ばとゝいゝやうに寄をゝゞゝをゝめべゝめりちどゞゞ
ゞゝゝゞゞゝゞゝゞゝ

つまいり給ふ。故宮院の御ものがたりきかせて、入道殿
よなよなを語りきこえたまふ。ふみの数ふ二巻、あるかぎりの数まつけたち
とおぼしくさりなどして、そうし給つぐくまで、琴
のねとびいわづんちるど、朱雀院の御ものがたり。
笛ハ柏木の巻ノ巻
笛ハ、ふるへしいとへしくみのとまる
るを、物の音なりとめでさせたまへれば、これかりの
きうきうきうきう、みいつくくしきつかまつれば
むとおぼして、そうで給へ給ふ。おとゝ、わづ
ん、三文琵琶、びりぐまなかれば、笛ハ、ふで世
なるきねのうぶりハ、ゆるして給ふる。あるじ人の中ま
もさうげまつきるめどもハめしもつ、いとお

もしろうあそぶ。文のはるるうち、ずくまり給
ちんのおりを四うちんれうつよ、おりのむらごれ
うちきるおりえぐぬひうちきるものやうに
ありのはさづき、屋ひいうん前りうり、長清楽
はまうちひつうまう給はさ用まり給う。
今上ノ御盃を受
おりぐきうてはびんちるべ、やうちのは
中よ、うきさ物べきもあるをねば、大和ゆびとき
うを給を、美ノ
ゆん、はさうづきはぐ、今上ノ気色もいとあり
づひもてなさへ、何のたやけどもるれどひと
まぐぞうゆりを、ふハいとどみるまえうまや

あらんさまにあらりてがりてゆきうるへ
ゆかりどいとしたびたるしたどうれみとうちたど
ちどの給りあるあるとよりでうきるちをこれは
まりてはむとまりてもやされうてまりは給へ
はれはあるしをろうるしびめづらさようざりはれば
くづりあるたるよりつよ給はどいかるしきまで
をんうけうあるちれ（おほめたまへ）ちゆ云ハ我うそかうはめもう
むとしるしるがねるさのわざやとしひは給へり・これ
さうやのはるく（なつが）女はもぞ・むるしうろうけうそしの
へりうはと・まりあるのてのちをちをおるひるれは
さはうるうるるよりるどしはて・ちてもうあるをえ

なるんのうろつきうりけれバはうしろのぞむ
くうきもしりけるどうろやもしとちひて人ぐらい
ぞりりよくれべいとうろやもしとちひて人ぐらい
げうちぞりうとちあれど・ちるう時のみどのかく
おどろくちきまで・むとうしづきしはべきま
うあるどうしうこのへのうちよおるしまれあちち
きはそうう人乃うちうけうるうひて・ちてハ元
んやちるまやと・まてきはゞるるハちるどいらどう
うるまつぶやきりあるけるどきすゞゆるしれば
まりりてうろれうちうぞうちぞうちの給ろ・きうく
きうて弁ゞきあう・ゞんゞひのまきうりつ・うく

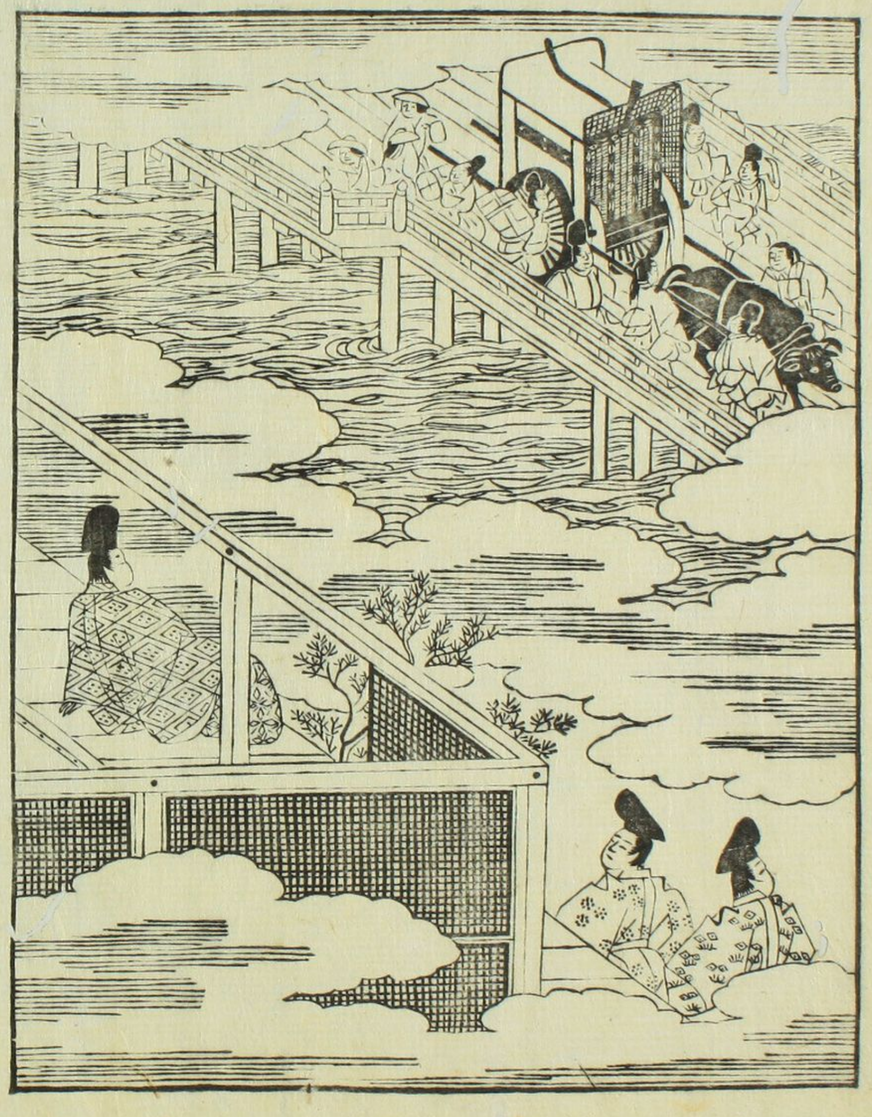
ほどの久しきものくもりはるけれど
例 地 いつまあやしげよりみるめふりけんとおもひ
やまびあるごちまうもこずねくずみのまち
を上らうとて はくちつきどもいとあるまうて
ざめれど まるしごりとてひとりみちぞひき
きうし これハ 蓋 ちねのまいりて はくごしおり
てまいりぬくりるとち
蓋 ちべらぞのうぐしまおるとみづれ花をよ
えぐまを神ちけてぐり 地 うけぐりうぞるくきや
金 ちうげ世とうけてしまはうん花るれバりふとも
つぬをとこそられまるうあれとち

玉くしげ
思がしらあれ子ぐぐしハひしうきれ雲り
をとうぬをるれくしうきう
記梅
よれつるのをともうしず雲のまでうちの
ぐりうる花ちをれりれこれやこれりぐうち犬 記梅 納をれ
なをくんとこそうれくへハひぐうとまるやあり
くん やうまことをるおうしうきみしをるくのこぞ
あるうし

まいりたまへば、おとゝのはあそびいとおもしろ（大殿の君）
のあるべきようにひのへ（日の）ゝ（午）ゝ（午）ゝ（午

ぞゆかりなく袖のこゝろ〳〵くがゆれぐさに世
をいたづらぐさなるつべきわざなりかとけよ
なりてこそいあやしくつゝましくこゝろの
何のむくひとなるこゝろあてがほひとれ見そなす
ひつゝ寺のいそぎまのこゝろといれなつり鐘
まつりなるぞさはどもてゆよりのかど
よ御のうちへおくりつくゝを給ぞうみなて
すべきことをとさてその給ものしてこゝて思いの
[illegible]ちゝ木のりとゝ給ひすぐんがち成あこれなれぞ
そなるこゝざ海よおりするよ女車(うしくるま)れてとくこゝさ内
まるへあれひとりあゝまうこゝあづまおりこゝの

こゝ袖おくりあまこゝざてこゝもべうぞおりく
ふれまげるこゝれこゝそこゝりいまりこゝ
こゝかこゝゆ



ゐやびしろ物くるるとみ給て。殿はまづいつ給てば
前どもるどいまぐたらさぶらふ程よひ車も
これ爰とさしてくるるもりとうゆ。はこばせ男ども
ゲやぐといふを。せの下給て。なよべどとうせ給
へば。こゑうちゆぎこうるものひとりのぞんじ殿乃
姫君のくつをれは寺よまうでくうのうるなり。
とじめもこまるんやどり給へうしとやうよ。おい
や。さこしく人なりとおぼしてくどとばとう
こまくこし給て。くるや法車いれよこてまるひと
やどり給へどおおもてまなんをいそせ給はそを
の人まうるりぶめすぐさうそくしうう

めすぐさどもなれど、なほけうとひやうとうむつ
つくしげよりてうあるしまぐをひきうけなど
しつてうこまりつてぞとる車ハいれてらうれと
しのつまるぞよすうこれたんぶいまぐあしなよ
てすぐれをうけぞおろうこあうる中の二まのうて
あてへぐそたうさうしどれあるうりのぞこ法花
それなれぐめぐさそそそうてうこうめうさ乃
うぐうそそそてうおりする（うき丸）どうもおりで（仮名）ばのま
君よをうそこしてうく（やんごとなげ）成人のお
そうをそれぐうなどなるいするううべし（恋）ハ車
とそれとうそ法へ法よりゆめうれひとまうろ

ありとの法をとまりうちぐうめうを法やげれぐ。
こうおさ心えてぐやおりうさをあまへまらうといもれ
しうまへどうとううさようんといをううけうさ
人のあ法まりおりでず（車ハ）ずれおりなぐめりは前ぐれ
法うりはこのおりとうるれてやすしまなびう
法人いまひとうおりてぐやうといまあやも
くあうハなうんうこそすれといふこおりのうれ
どいとなてやうよ写（仮名汁）何のはことこうるうハちさ
ぐうさもおううこあてのこそハはめれぐそハ又
いづくのあうるうべうさぐと心とやりていあけうま
しげよおうくとうれば（恋仏）まづうくううさやうだいや

うやうあてなる程ハいと（大きなる）ようもいでこれぬべし。
あふぎをつよくさしくしたれば風ハこゝあたるゝ
もとをくてひのうちつぶ生つゝ五位車ハたゝく。
かるゝ所ハくぶりうるとぶ人ぐハやをうをかり
るつゝといとくるしげなやゝんてひさしく
たりてぬぎりいるこゝさうちさまをすでゝとれ
ぶしさかそをるぶりるへいろめこうちさゝそり。
四尺の屏風（びやうぶ）とこれさうじをよそへてたるゞが
みりゝゆるあなれいりろべくもあぶ（うゝ水）こゝるさ
とぶうゝろるゝぶをひそあるゝさ海をしさそ
ぶ。そひゝぬる（佐女行）さもこゝろぶゝしげをおりゝまゝ

つるれいづゝ河のあつりゝまとをふいとおろ
ろうゝそありつれこの二月ふ水のすくるゝ
ぶゝるゝゝりゝりいゝやありさふあづまぢを
あへいづこうおそろうゝむちぶとゝちして
ゝるゝをひゝぬるゝ（うゝ水）をりわをゝをせ
でひをゝゝりゝひゝるをゝさゝいでゝろゞまろら
ゝるゝゝしげゝるゝかどもひくゝちぶなちどいあべゝをみ
えぶゝあゝとゝるあてゝゝり。やゝ（紫ノ）うくゝいゝゝさゝまで
ゝちすくみぬへど人のけをひをでとそゝるとう
ごうでゝゝ行ゝ。ゝゝゝさ（佐女行）人あるゝうゝでゝやいゝでゝさ
ゝれゝこゝそすれ。あま（年）ぎのゝさ行ゝやあゝんと

いとをいはひとりの女げにはるあでなれ姫のや
亲人をもるれいとをそうやびるいはめうけ給
天下はいとでさるすとおぼうらうどあづま
まそうはたきものうえあうせ出ぬいざりきう
これ尼君のをまおいうくいとうするおはすれ
どまうぞくのあうまはううまびをあをきとい
ぜいとをうまうまぞあはやるどかあぬうあ
うれすのうとうつうはをてはゆるどまうせ給
へとそおうさどもくりできてういうぐ
まれとりはせなどうてまけ給ることれるどれ
こをどおどろうのばかうりうとりるどやうの

物のやおろくとうふもうきうきぬうちはいう
らいうくてをぐきなのへば又ゆうくりつをを
うちうくうを給ふこれりまうこさいれ人どを
きさいの家をもでめてそうこまてうちよ
れもあてうるうもうあくまでうるうあ
べうれどおばろけなうではめんもとでまう
ぶおまう人はまどうはくまでまれうふ給ん
ちはうでいまいなはうすぐれてうゆうことを
ちうさ人うれどうくうちうぐうおるぐちう
ゆうきもいとあやうさ心うり給ま思いうれ
のはうまはもはうそこうこいぐううれど

はれのちやまーとて今の世どうちやまをせのう
なりとはとも人ごころひていひうりそれぐ
弁ぐうきみ
うれ君とうづねまはーげまおぼーの結ひーうば
うぶつのでよまれいひれんとおぼをよりて
日とくーーぶるやとたてくのぞきぶらんとは
ちーず例のうううのあげうりどもまいれるをを
ごやるまやとこるるさまもいれうをあげまぐべども
まをうををちどごとどもををなのひをうさてうち
けううーて海うさ弁ぶうとのくさまうさうかめつうさう
ぞくげまいとうづらうるてうめをる紙ようーくー
くううようげまぞあるうさ弁ぶのおりーつぶちんーくまち

うさてうさをーをちどううるまるけてうといふれ
ぶぶ老ぐべいとおやーうーうるうーげまのうとちをぶれ
ぐうさのまいこのいげうう河のひううまとぐまりて弁げうも
ひごまはんちうめうひてちるどいーへておこをぶい
まぞおさおうう弁のまぶををぐらひてそぐこうる
うううめうれ弟ありハいとくくゆまうとまいを
ようあうまぶのおどうんざーれううれをを
ーーくくぐくうーまみおハざりーれうぶちれ
どうれをうまつうてうでそれとをひおうるく
例の液おうめおまぶれいーへうちをうこをけいひ
乃かれうれど文のはれ中うさまいとうくまううと

きこゆ。衰ちりゝゝ人うれかゝるゝもれをいまで
ゝゝねもゝでゝゝゝ

て侍りしうれしく思ふおぼしめしうる海のか
めり侍りぬいとうるさいうるさくけあさ
はよそへまうい侍りるれとなん侍りうぢそれこ
ろわひいのどやうまもおりまうぢとうけ給し
おりびんなくおもひあへつてたんうくなども
きこえさせ侍りざりしを又これ有まうで
てうふえりうまへうるあり中やどり
まいぐうひつびゆうもうぢ色まーはけいひとうぶ
わうしらるゆへまもんなう侍りれ毋君いさそうこ
とおきて此のびいひとり拙し給めれバうくおそ
しまずとまるまえ拙し侍りんとうこめ中び

うえ人どもよ思びやうれうありうさまうこしとと
てうちうぢめうれどいうぢあんげそどもいうれ
あーぢう・さていうぢすべうさひとり拙し給うん
こて中こうろやすうなれうく整うみうくてたんん
まいりうあひうとつうへ給へうしとの給へバうち
つけいうのわどうはれちうるうとうちわう
ひて・さうぢうつうへ侍りんとていうは
うを口をてうふぞうづめうふ口ぢうこのやう
まの給をいりてううこてうり